

赤坂ソフトパーク内遺跡群
四ツ石遺跡

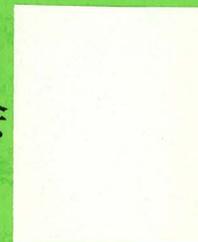
なかまきづかこふん

中秣塚古墳（県史跡）

赤坂ソフトパーク・特別養護老人ホーム
開発に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告

1997. 3

山梨県竜王町教育委員会



序 文

竜王町は甲府盆地のほぼ中央部に位置し、西には釜無川が流れ、赤坂台地以外は平坦地
であります。

また、甲府市に隣接しており、近年人口が急増し都市化が進んでおりますが、古墳、信
玄堤などもあり、歴史豊かな町でもあります。

本報告書は、赤坂ソフトパーク第二期開発及び特別養護老人ホーム開発に伴う試掘調査
及び中秣塚古墳についての調査をまとめたものです。

中秣塚古墳については調査終了後、県の史跡として平成8年に指定を受けたところ
ですが、今後、この資料をもとに様々な分野で活用していただければと考えています。

最後に、今回の調査に協力して頂きました関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

竜王町教育委員会

教育長 廣瀬 洋

例 言

1. 本報告書は平成6年度から8年度に竜王町教育委員会が実施した竜王町竜王・竜王新町内の赤坂ソフトパーク内遺跡群、四ツ石遺跡の調査報告である。
2. 発掘調査は竜王町の経費負担と文化庁・山梨県からの補助金を受けて赤坂ソフトパーク内遺跡発掘調査団（清水富貴雄団長）が行った。
3. 調査体制については巻末に記載する。
4. 遺物の整理、製図、トレースは皆川洋、和田弘行が行った。
5. 図版の作成、原稿執筆及び本書の編集は皆川が行った。
6. 直刀、金環、鉄鏃などの金属製品の保存処理は財団法人山梨文化財研究所に委託し行った。
7. 地中レーダー探査調査は、（有）テラ・インフォメーションサービスに委託し行った。
8. 遺物、図面については竜王町教育委員会に保管してある。
9. 本書の編集にあたり、大塚初重、十菱駿武、坂本美夫、畑大介氏に校閲をお願いした。
10. 発掘及び整理事業に際し下記の諸氏、機関からご協力ご教示をいただいた。記して感謝したい。
大塚初重、田代孝、末木健、坂本美夫、河西学、宮沢公雄、小林広和、森原明廣、吉岡弘樹、大寫正之、保坂康夫、出月洋文、中山誠二、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県考古博物館、山梨県教育委員会学術文化課、財団法人山梨文化財研究所、山梨県考古学協会、山梨学院大学考古学研究会

調査体制

赤坂ソフトパーク内遺跡発掘調査団

団 長	清水富貴雄	（竜王町教育委員会教育長）
副 団 長	相川 和弥	（竜王町文化財保護審議会会長）
委 員	斉藤 清	（竜王町文化財保護審議会委員）
	花形 幸雄	（竜王町文化財保護審議会委員）
	赤沢 正規	（竜王町文化財保護審議会委員）
	羽中田壮雄	（竜王町文化財保護審議会委員）
	安藤 正	（竜王町文化財保護審議会委員）
	十菱 駿武	（山梨学院大学教授）
	畑 大介	（財団法人山梨文化財研究所室長）
調査団事務局	米山 昇	生涯学習課長（平成6、7年度）
	植松 芳俊	”（平成8年度）
	小宮山謙二	文化振興係長（平成6年度）
	大久保典男	”（平成7年度）
	小林 修	”（平成8年度）
	保延 克教	文化振興係
担当調査員	皆川 洋	”
発掘作業員	石川弘美、居村道夫、長田由美子、小野圭、小野洋子、加々美薫、加藤美恵子、構ミチ子、楠山和幸、窪田よし子、小窪一嘉、近藤博之、座間昭子、島田美千子、杉山大輔、関本芳子、武井鉄哉、千野ひろみ、土屋菊男、鶴田直美、長井和久、中村謙一、中山友一、広瀬俊江、藤原寿美恵、藤原洋子、保延勇、丸山佳代、丸山勇、向山美奈江、村井俊子、村松正己、和田弘行、和田武徳	

目 次

序文

例言

第1章 周辺の遺跡と環境	1
第2章 調査に至る経緯	2
第3章 調査の経過と方法	2
第4章 遺跡の概要	4
第1節 赤坂ソフトパーク用地	4
大原南遺跡	4
丸山古墳	4
中秣遺跡	4
四ツ石塚古墳	4
出土遺物	7
第2節 四ツ石遺跡	7
出土遺物	7
第3節 試掘調査まとめ	11
第4節 中秣塚古墳	12
墳丘	12
内部構造	12
石室礫床	15
前庭部	15
出土遺物	15
須恵器	15
土師器	19
武器	19
装飾品	19
その他の遺物	22
考 察	22
墳丘	22
内部構造	22
前庭部	24
裏込め	25
古墳群のグループ	25
出土遺物	25
第5節 中秣塚古墳まとめ	26
参考文献	26

挿図目次

第1図	竜王町遺跡位置図	1
第2図	調査範囲図	3
第3図	赤坂ソフトパーク内遺跡（業務用地）調査トレンチ設定図	5
第4図	赤坂ソフトパーク内遺跡（公園用地）調査トレンチ設定図	6
第5図	四ツ石遺跡調査トレンチ設定図	8
第6図	赤坂ソフトパーク内遺跡	9
第7図	赤坂ソフトパーク内遺跡・四ツ石遺跡出土遺物実測図	10
第8図	中秣塚古墳平面図	13
第9図	中秣塚古墳石室展開・礫床平面・エレベーション図	14
第10図	中秣塚古墳出土遺物（須恵器）実測図	16
第11図	中秣塚古墳出土遺物（須恵器）実測図	17
第12図	中秣塚古墳出土遺物（土師器）実測図	18
第13図	中秣塚古墳出土遺物（直刀・刀子）実測図	20
第14図	中秣塚古墳出土遺物（鉄鏃・ガラス玉・金環）実測図	23

第1章 周辺の遺跡と環境

本遺跡群は、甲府盆地のほぼ中央に位置し、釜無川と貢川に挟まれ、茅ヶ岳から延びた南端の茅ヶ岳岩屑流の赤坂台地に立地する。

現在赤坂台地に現存している古墳は中継塚古墳を含め6基が確認でき、古くは30基ほどが赤坂台地上に存在しており、赤坂台古墳群といわれている。

昭和53年(1978)山梨県教育委員会が本町では初めての本格的な遺跡調査を行い、竜王二ツ塚1・2号墳からは馬具などが出土したが、現在のところ住居跡は確認されておらず、赤坂台地東側の、荒川、貢川に挟まれた扇状地に縄文から中世の集落跡が多く点在している。また、荒川の東部甲府市内には加牟那塚古墳、大平1・2号墳など古墳、また住居址の分布もみられる。赤坂台地に分布する当該開発用地の遺跡は次のようである。

- | | | |
|----------|-----------|--------------------------------|
| 1 大原南遺跡 | (近世・江戸時代) | 遺物密度の薄い遺跡。深さ30~40cmのところに遺構がある。 |
| 2 中継塚古墳 | (古墳時代後期) | 円墳・横穴式石室があると考えられる。 |
| 3 丸山古墳 | (古墳時代後期) | 円墳。 |
| 4 中継遺跡 | (古代・中近世) | 丸山古墳を中心に広がっている埋蔵文化財包蔵地。 |
| 5 四ツ石塚古墳 | (古墳時代後期) | 昭和7年に発掘され、鉄製品などの副葬品が出土している。 |
| 6 四ツ石遺跡 | (近世) | 密度の薄い散布地 |



第1図 竜王町遺跡位置図

第2章 調査に至る経緯

昭和62年(1987)に山梨学院大学考古学研究会に委託して竜王町遺跡詳細分布調査を行なった際、赤坂台の旧甲州街道沿いを中心に遺物の採集ができ、以前から確認されていた古墳を含めて10ヶ所の遺跡登録をした。

昭和63年(1988)に第一期赤坂ソフトパーク開発に伴い、蛇塚古墳・二ツ塚遺跡の試掘調査が行われ、農地を区画する溝状遺構のみを確認したが、本調査には至らなかった。

平成6年(1994)に赤坂ソフトパーク第二期開発(業務用地、公園用地)の計画に伴い、用地内に古墳を含めた遺跡が5ヶ所点在しているため、竜王町地域開発課と協議した結果をもとに、県の指導を受け町教育委員会が主体となって赤坂ソフトパーク内遺跡発掘調査団を組織し、調査の承諾を得られた土地から遺跡確認調査を行うことになった。

また、赤坂ソフトパーク内遺跡の試掘調査の期間中に、特別養護老人ホーム建設の計画もあり、その予定地には近世の遺物包蔵地の四ツ石遺跡があるため、業務用地の試掘終了後に遺跡確認調査を行った。

第3章 調査の経過と方法

当初、赤坂台地は散布密度が薄いため、埋蔵文化財包蔵地内のみを調査の対象と考えていたが、県教育委員会学術文化課との協議で、大規模開発の場合については開発の全区域が対象となり、開発面積の5%以上を調査するようとの指導があった。この結果、遺跡の確認調査として重機で幅1.2m、Ⅲ層(褐色土)上面までのトレンチ(試掘溝)を対象面積の5%以上掘削し、精査を行い遺構の有無の確認を行うこととした。また、中稜塚古墳・丸山古墳・四ツ石塚古墳については、試掘調査の前に地中レーダーで事前に探査を行った。中稜塚古墳の調査については、試掘調査で遺構が確認できたが、石室内に遺物が存在した場合、鉄製品の腐食(劣化)のことも考慮しなければならず、県学術文化課と協議した結果、古墳の本調査も併せて行うこととなった。

また、調査の経過は次のとおりである。

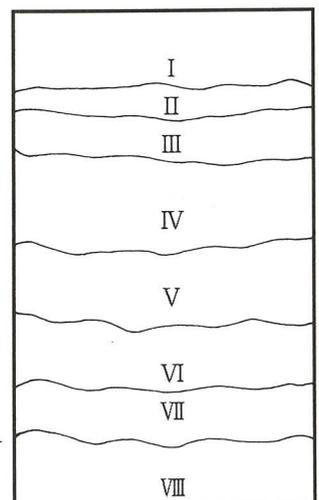
- 平成6年5月9日 赤坂ソフトパーク業務用地内試掘調査開始(大原南遺跡)
 - 平成6年7月20日 赤坂ソフトパーク業務用地内試掘調査終了
 - 平成6年7月21日 特別養護老人ホーム開発地内試掘調査開始(四ツ石遺跡)
 - 平成6年9月1日 特別養護老人ホーム開発地内試掘調査終了
 - 平成6年9月7日 赤坂ソフトパーク公園用地内試掘調査開始(丸山古墳、中稜遺跡、四ツ石塚古墳、中稜塚古墳)
 - 平成8年6月23日 赤坂ソフトパーク公園用地内試掘調査終了
- 発掘調査延べ21ヵ月、発掘調査面積6,546㎡

大原南遺跡で確認した標準土層は次のとおりである。

標準土層柱状図

- I層 表土 (耕作土) 15cm
- II層 褐色土 粘土質、黒色スコリア含む。
- III層 褐色土 粘土質、黒色スコリア含む。
- IV層 暗灰色土 粘土質、黒色スコリア多量に含む。
- V層 褐色土 茅ヶ岳ローム、黒色スコリア含む 50cm
- VI層 褐色土 鉄分含有ローム 20cm
- VII層 青灰色土 木曾御岳第1軽石層(O_n-P_m1) 50cm
- VIII層 黒灰色土 粘土質土。葎崎岩屑流を含む。

II層とIII層は非常に似ているがスコリアの含有量で分けることができる。また、IV層暗灰色土は粘土質であるが、ほとんどを黒色スコリアで占めている。



第4章 遺跡の概要

第1節 赤坂ソフトパーク用地

赤坂ソフトパーク第二期開発は業務用地と公園用地の開発で、両用地とも昭和62年(1987)の分布調査のなかで遺物の表面採集が少なかったなか、業務用地は字大原から遺物が採集され、旧甲州街道(信州往還)にも面しているため近世の大原南遺跡が登録された。また、公園用地内は、中秣塚古墳、四ツ石塚古墳、丸山古墳、散布地の中秣遺跡が登録されている。

大原南遺跡

埋蔵文化財包蔵地である大原南遺跡には3本のトレンチを設定した。トレンチ内からは住居跡は確認できなかったが、各トレンチとも東側より旧甲州街道に沿って溝状遺構が検出した。溝状遺構は深いところで約60cm程度であるが、幅はコンクリート道路基礎の設置のために東側の立上りが破壊されており、現状では1.2m程度の幅が確認出来た。10~39トレンチからも溝状遺構が確認でき、この溝は青灰色土層まで掘り込んであった。このうち10~16トレンチまで、深さ1m、幅1~1.5mの溝状遺構がトレンチ西側から確認できた。遺構覆土には砂質・砂粒質土の検出がなく、農地の区画のために掘り込まれた根切溝であると推定する。このほかのトレンチからも数条の溝が検出できたが、砂質土層もなく、V字状断面であることからこの付近には溝を掘って土地の区画を行っていたことがうかがい知ることができる。

業務用地内では縄文・中近世・近現代の遺物が出土してはいるが、耕作土或いは搬入土より出土したものがほとんどである。大原南遺跡北側に設定した9トレンチからは2層目の赤褐色土層に黒曜石片が出土し、30トレンチからは、溝状遺構の覆土から打製石斧が出土した。付近から縄文時代の遺構が確認できなかったので、縄文時代の散布地か、外から持ち込まれたものが他の礫とともに捨てられたとも考えられる。

丸山古墳・中秣遺跡

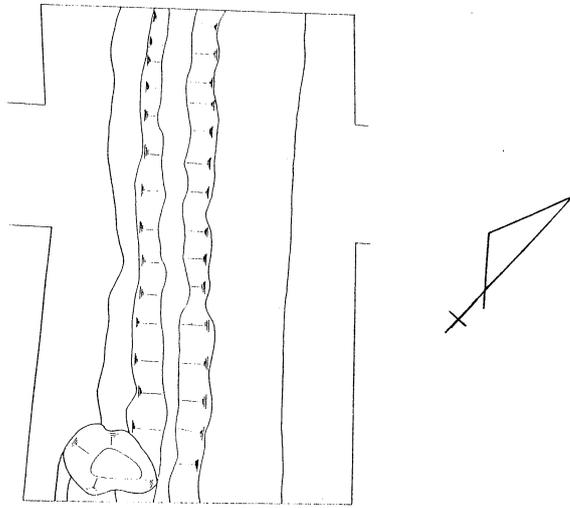
丸山古墳は『中巨摩郡郷土研究』によると「龍王村龍王原村上にあり。周囲約80米、高さ約5米の円形にして、その南面せる部分は二段となれり。出土品なし」と記述され、周溝については記録されていない。現状では標高340mを中心に丘のようになっている。また、中秣遺跡は丸山古墳を囲むような形で遺物が採集でき、埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

試掘調査の事前に丸山古墳を中心として地中レーダー探査を行なった。石室と推定される地点を中心に測線12本を設定し、地中の落ち込みなどの変化を調べた。丘頂上部では礫群の反応があり、数ヶ所で落ち込みの反応もでた。この結果をもとに7本のトレンチを設定し掘り下げを行った。丘頂部には地中レーダーの反応と同様に深さ20cmの褐色土層中から礫が確認できたが、遺物や古墳と関連する落ち込み、盛り土は確認できなかった。

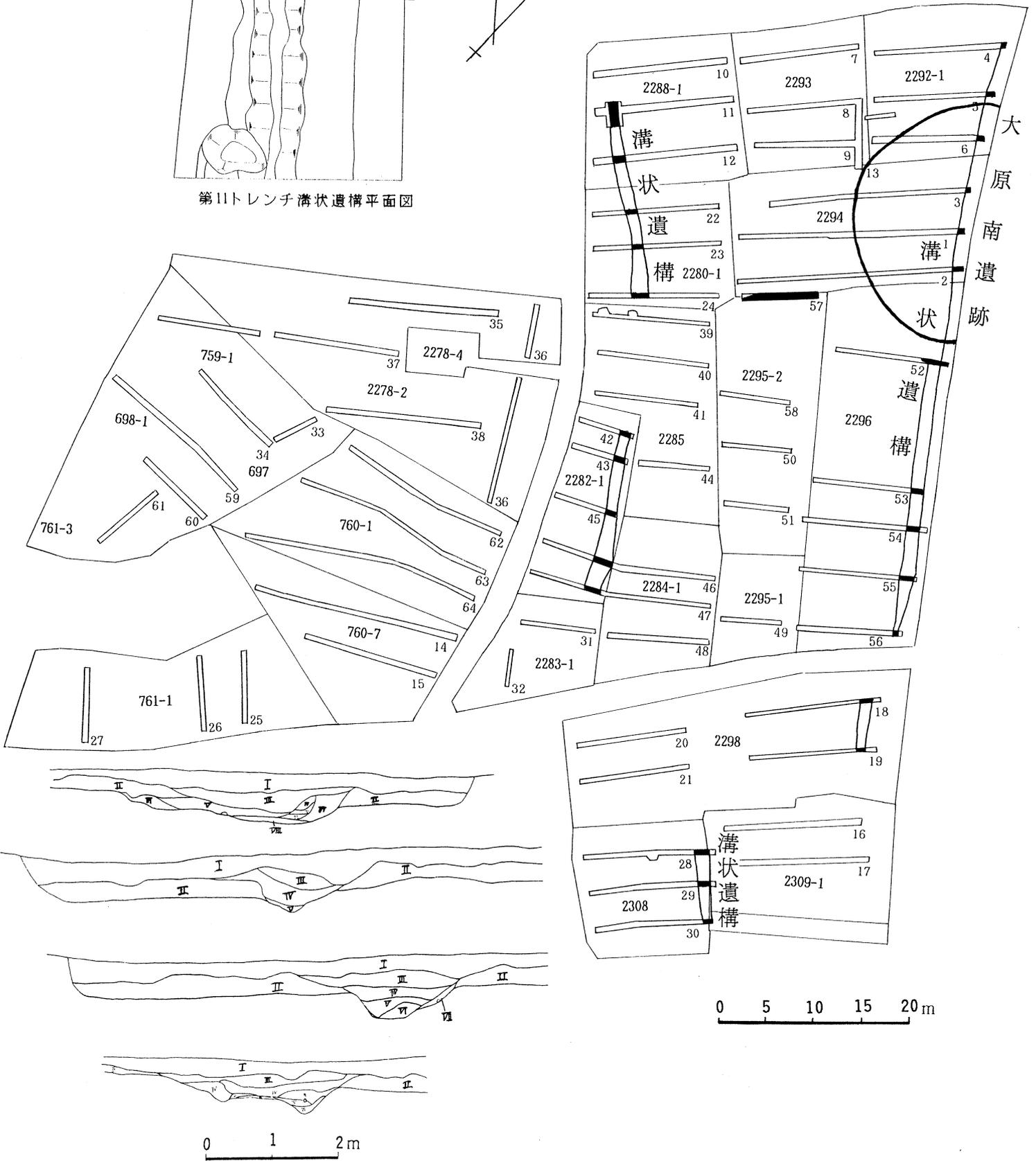
中秣遺跡(丸山古墳南側)に2本トレンチを設定し掘り下げたところ土坑が2基検出した。土坑の形態は楕円形で、径50cm、深さ30cmである。銭貨が土坑から約7m東の表土に5枚重なって採集されたため、新たに5本のトレンチを設定して調査を行ったが、土坑等の遺構は新たに確認できなかった。また、土坑内からは遺物の出土はなく、銭貨以外には遺物の出土はなかったため、全面を掘削せず2基の土坑の測量を行ない調査を終了した。

四ツ石塚古墳

四ツ石塚古墳は昭和7年(1932)に発掘がされており、『中巨摩郡郷土研究』において無名塚Aとして「龍王村



第11トレンチ溝状遺構平面図



第3図 赤坂ソフトパーク内遺跡(業務用地)調査トレンチ設定図



第4図 赤坂ソフトパーク内遺跡(公園用地)調査トレンチ設定図

四つ石にあり。開墾されて桑園となり、現在は石槨の一部をなせる石数箇あるのみ。その規模は知る能はず。」と記述がされ、遺物は金環、馬具（轡）などの金属製品が出土した。現状は桃畑で墳丘も石室もないが、表面踏査、試掘においても須恵器、刀子など遺物の出土もあり、地中レーダー探査の結果でも落ちこみなどの反応があった。この結果をもとに全体の掘り下げを行い、桑や果樹等の開墾による攪乱がⅢ層まで及んでいるところが多く、石室があったと推定される場所については深さ1 m以上も攪乱されていた。

遺物の出土もあることから付近に古墳があったことは事実であるが、遺構は破壊され確認できなかった。

出土遺物

赤坂ソフトパーク内遺跡の業務用地内からは、灯火器1点、スクレイパー1点、打製石斧1点、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、銭貨5点などが出土した。

灯火器：11トレンチ内の西側の溝状遺構底部から出土し、出土した土器では唯一完形品であった。器形は脚付きで体部が椀形で、口縁部に付着している釉の色調は黒褐色の鉄釉で、口径5.2 cm、高さ5.3 cm、底部4.2 cmを計測する。この灯火器は美濃・瀬戸系の施釉陶器で、中央に芯を置き使用されたひょうそくで、江戸時代中期から後期にかけての製品であろう。

石器：石器は打製石斧、スクレイパーが出土した。打製石斧は業務用地内32トレンチの溝状遺構の覆土からの出土で、縄文時代のものであろう。スクレイパーは黒曜石製で9トレンチから出土した。黒曜石は長野県和田峠の産出のものと推定する。

土師器：出土した土師器はすべて坏である。土師器坏は口唇部が玉縁で、内面に放射状暗文が施されている。器厚も薄く、土師器編年ではX期の形態等の平安時代の土師器である。また、内面に暗文がなく口唇部が丸形の形態をもつ土師器坏片も検出し、土師器編年ではⅫ期～ⅩⅢ期になる。

中林遺跡から南へ50 mほど下った182トレンチの溝状遺構から、土師器とともにかんざしが出土した。長さ14.7 cmの銅製で形状から江戸時代につくられたものと判断する。

銭貨は丸山古墳東側、中林遺跡北側の畑から5枚重なって表面採集した。乾元重寶(鑄758年)、淳化元寶(鑄990年)、熙寧元寶(鑄1068年)、正隆元寶(鑄1161~78年)、永樂通寶(鑄1408年)と読み、唐から明時代に鑄造された渡来銭である。

第2節 四つ石遺跡

四つ石遺跡は昭和62年竜王町遺跡詳細分布調査で登録された近世の遺物散布地である。

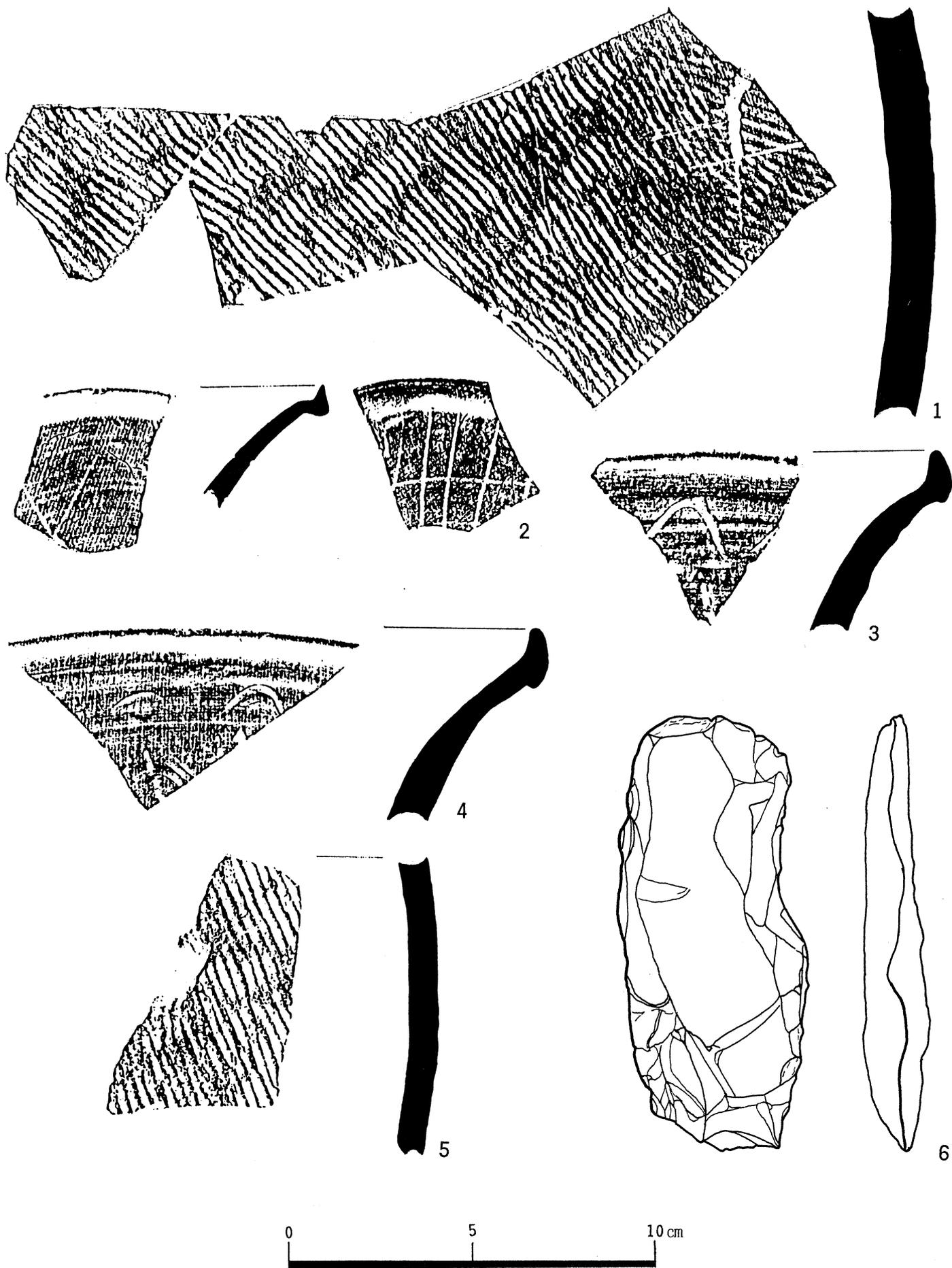
12本トレンチを設定した。1・2・4・5トレンチで各2ヵ所から落ち込み(溝状遺構)が確認できた。2条の落ち込みは同じ場所を掘り直しをしているため、最大幅約5 mにも達するものもあり、深さは最大で表土から約1.3 mを計測し、この溝は開発用地を縦断している。東側端に確認できた溝は、赤坂ソフトパーク内遺跡から検出した溝状遺構と堆積土が異なり、砂質・砂粒質土が下部から検出され、水が流れたことがうかがえる。

この遺跡の南へ下ったところに旧慈照寺跡があり、2条の溝状遺構はそこへ水を流すために造られたものと考えられ、水路の役割を兼ねたものであると推定される。赤坂台に溜池跡が今回の調査では確認出来なかった。地元の話では、昔、赤坂台地の四つ石塚古墳の東側には小さな溜池があったといわれ、そこから慈照寺まで水を流していたのであろうか。

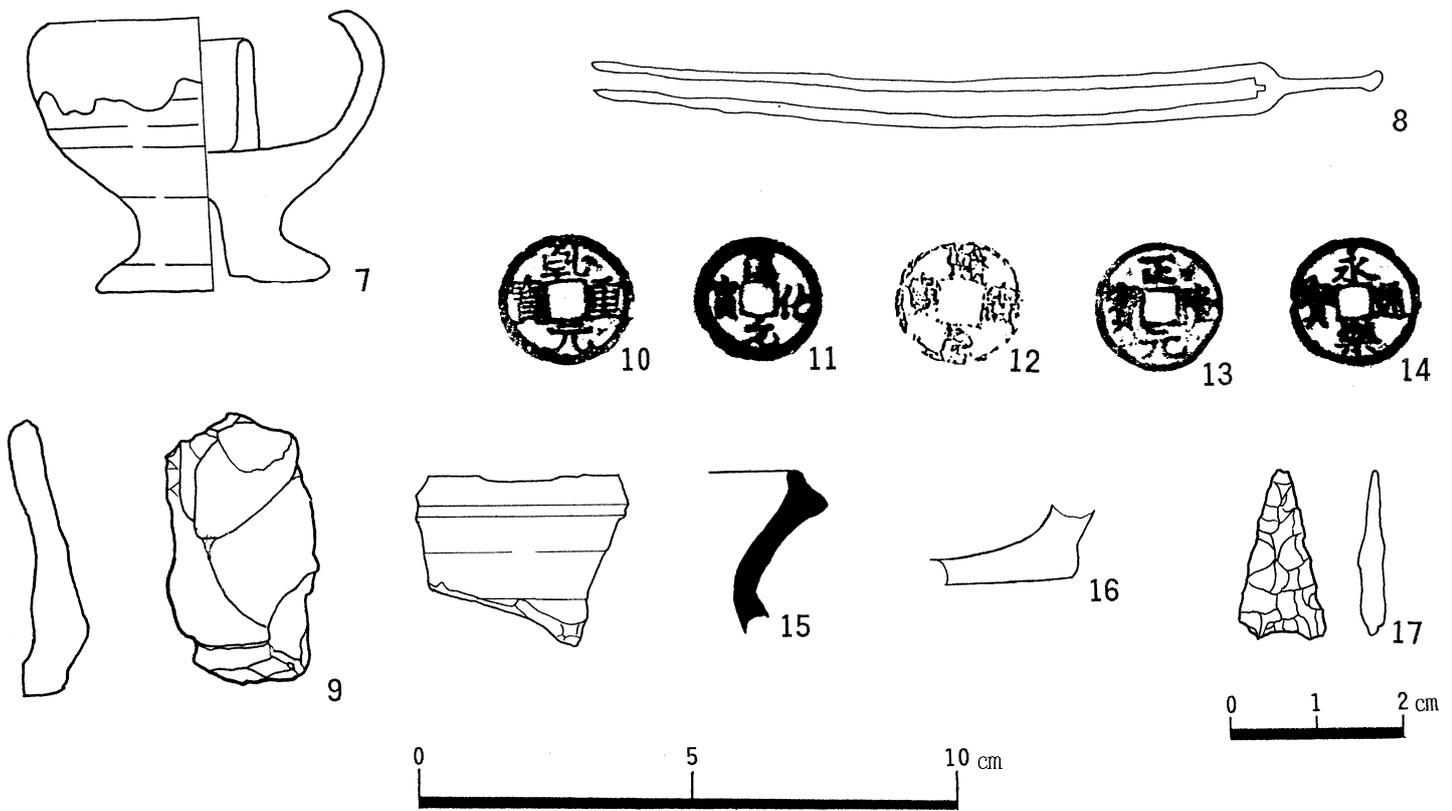
出土遺物

土師器片1点、内耳土器2点、黒曜石(石鏃)1点が出土した。

このうち土師質土器、内耳土器片が溝状遺構底部から出土したが、内耳土器は底部のみであったため、最後に



第6図 赤坂ソフトパーク内遺跡出土遺物実測図



第7図 赤坂ソフトパーク内遺跡・四ツ石遺跡出土遺物実測図

出土遺物一覽表

単位 cm

番号	器種	法量(口径×高さ×底部)	調整	備考
1	甕		板目タタキ	中秣塚古墳 体部 須恵器
2	"			四ツ石塚古墳 口縁部 須恵器
3	"			" " 須恵器
4	"			" " 須恵器
5	"			中秣塚古墳 体部 須恵器
6	打製石斧	長さ12.2×幅5.1×厚さ1.8		赤坂ソフトパーク遺跡業務用地内 29トレンチ溝状遺構内覆土 粘板岩、シルト
7	灯火器	5.2×5.3×4.2	ナデ調整	赤坂ソフトパーク遺跡業務用地内 11トレンチ溝状遺構内 美濃・古瀬戸系施釉陶器
8	かんざし	長さ14.6		赤坂ソフトパーク内遺跡公園用地内 182トレンチ溝状遺構内 銅製
9	チャート	長さ5.2×幅2.8×厚さ1.0		赤坂ソフトパーク遺跡業務用地内 9トレンチ2層 黒曜石
10	銭貨	径2.5		中秣遺跡 乾元重寶 初鑄758年 唐銭
11	銭貨	径2.4		中秣遺跡 淳化元寶 初鑄990年 宋銭
12	銭貨	径2.3		中秣遺跡 熙寧元寶 初鑄1068年 宋銭
13	銭貨	径2.4		中秣遺跡 正隆元寶 初鑄1161~78年 金銭
14	銭貨	径2.5		中秣遺跡 永樂通寶 初鑄1408年 明銭
15	瓦片			四ツ石塚古墳 口縁部 須恵器
16	ホウロク			四ツ石遺跡 2トレンチ 溝状遺構内
17	石鏃			四ツ石遺跡 3トレンチ 黒曜石

掘り直しが行われた溝の底部からの出土であり、中近世の遺構であることを物語る。付近に遺跡がないことから、外部から持ち込まれたものと判断する。また、石鏃は黒曜石製で尖頭形を呈し、長さ2.2cm、幅1.1cmある。赤坂ソフトパーク内遺跡同様、長野県和田峠の産出のものと同様と推定する。

第3節 試掘調査まとめ

今回は遺跡詳細分布調査の報告をもとに試掘調査を行った。時期の明確な遺構が確認できたのは中秣塚古墳だけであった。溝状遺構は多く確認できたが、これらは出土遺物などから近世に掘り込まれた農地の区画として構築された根切溝と考えられ、現在の土地の区画と重複あるいは平行して掘り込みがされていた。

南北に掘り込まれている溝は堆積するのが早かったためか、掘り直しがされているものが多く、四ツ石遺跡では、ソフトパーク内遺跡ではみられなかった砂質・砂粒質土が溝から検出された。頻繁に水が流れていたことがうかがえ、土地の区画以外の役割を兼ねていたものであると考えられ、四ツ石遺跡から南下したところに旧慈照寺跡があり、その水路と兼用して使用されていた可能性が十分考えられる。

中秣遺跡からは土坑2基が確認され、付近から銭貨（主に宋銭）5枚が表面採集でき、丸山古墳もこの付近に構築されていたことも考慮すると、中世土坑墓と考えられた。しかし、土坑内からは遺物の出土もなく、新たに設定したトレンチからは土坑が確認できなかったこともあり、2基の土坑の測量を行い調査を終了した。

中秣遺跡の中央丘の丸山古墳からは石が集中して検出され、古墳の基底部の可能性も考えられたが、丸山古墳周辺からは礫を含んだ自然堆積層もみられるため、出土礫は葦崎岩屑流でここまで運ばれてきたと考えられる。

遺物については、縄文から近世にかけての遺物が出土した。古いものでは縄文時代の石鏃・石斧である。これらは溝内から確認されたものの堆積土中からの出土であり、そのほかでは、耕作土内からの出土が多く、唯一黒曜石（スクレーパー）が大原南遺跡北側のⅡ層からⅢ層にかけて出土した。付近からは工房や黒曜石の剥片の出土もない単独出土で、縄文の遺構も確認できず、他の石器などと同様に赤坂台地での縄文時代の何らかの活動を示すものであると考えられる。多くの須恵器や土師器は外部からの搬入土中からの出土で、搬入された土は砂礫質で赤坂台地のものではない。なお、中世遺物についてはこの地に持ち込まれたものであるが、近世の遺物は溝状遺構からも出土し、耕作時に持ち込まれたのであろうか。また、中秣遺跡の南側からは「かんざし」が出土したが、江戸時代には下今井宿に抜ける道が旧甲州街道の他に中秣遺跡の西側に存在し、溝状遺構はこの道の脇に位置しているため、この溝とかんざしの整合性はあるであろう。

第4節 中秣塚古墳

中秣塚古墳は赤坂台古墳群の1基で、標高は349mあり、現存している赤坂台地にある古墳のなかでは最高地に構築されている。現状は字中秣369の桑畑であるが、休耕されたままで放置されたため、抜根による破壊はまぬがれていた。

『中巨摩郡郷土研究』には掲載されていないが、昭和53年(1978)の西山雪江氏の記録に「中秣塚 周30m、高さ2.5m」とみえる。古墳の天井石は崩壊しているものの、墳丘の残存状態も比較的良好な古墳である。

中秣塚古墳は、当初、試掘調査(範囲確認調査)のみを実施したが、緑地として現状保存するため県の指導もあり全面発掘調査を行うこととなった。調査は平成6～8年に赤坂ソフトパーク内遺跡の調査と並行して行った。

昭和62年(1987)の分布調査の報告(十菱1988)によると、墳丘径約13m、高さ2.3mの円墳で、積石塚古墳の可能性はなく、古墳時代後期の円墳と考えられていた。試掘調査では墳丘端の確認と周溝の有無についての調査を目的とし、古墳を中心に放射状にトレンチを5本設定(25～29トレンチ)して、人力で掘り下げを行った。但し、墳丘北側は双葉町内に属するため試掘は行わなかった。25・26トレンチのⅡ層からⅢ層で遺物が出土したが、周溝は確認できなかった。28トレンチの墳丘側にはテラス状の段がありそこから西側へ落ちこんでいる。底部には礫が確認でき、古墳の葺石が崩れ落ちたもので、その下から須恵器片の遺物が出土している。29トレンチからもテラス状の面が確認でき、テラスからの落ちこみ部分については、溝状遺構が古墳正面を東西に走っているため同様の落ち込みは確認できなかった。石室の主軸はほぼ南北に一致し、奥壁・側壁の一部分も確認出来る。これらの試掘調査の結果をもとに全面調査と石室の清掃調査が行われた。

墳丘

この古墳の現状は北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。墳丘は周辺の粘土質の茅ヶ岳ローム褐色土を使用し、積み上げを行い、北部にかけて盛り土は低くなる。また、石室を主軸として東と西では高低差があるため東側の盛り土は若干多く盛られている。

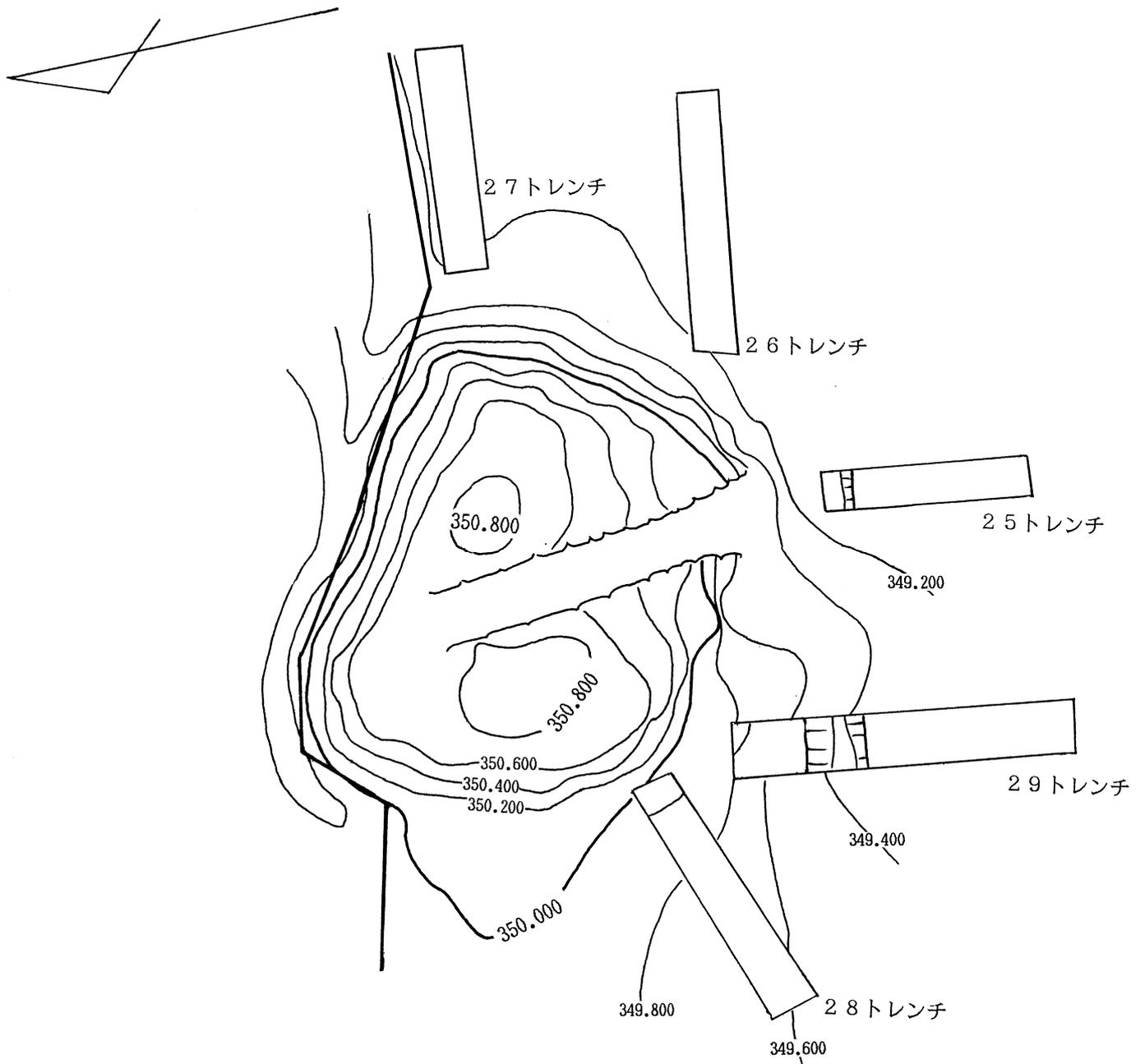
墳丘の中段には列石が確認でき、試掘の際には墳丘端であると考えていた。調査範囲を広げた結果、古墳の中段であることが確認できた。列石は石室閉塞部から廻っている。これらの列石は掘り込んで置かれたものではなく、墳丘に貼付けた程度のものであった。東側は崩れ落ちてしまったと考えられ、現在列石は残存していない。列石の大きさも一定しておらず、古墳南面には60cm以上の礫を設置しているが、西から北にかけては20～30cm程の石を残す。東側についても正面に列石があり、20～30cm大の石を2段に積み上げた形で東へ約1m現存するだけで、裏込め部分で消滅している。

内部構造

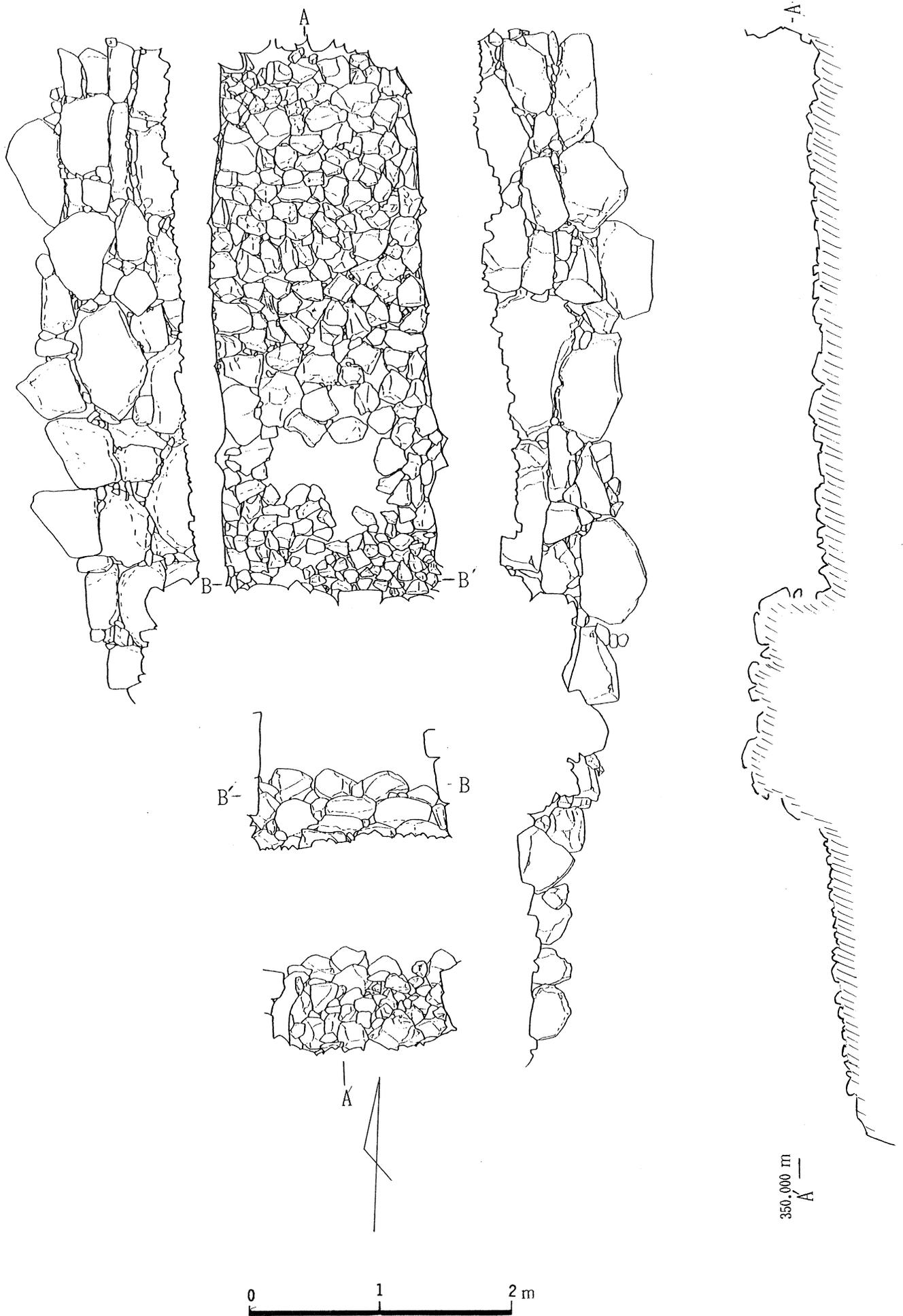
石室は、無袖型胴張りを呈する横穴式石室で、石室の規模は、長さ約6m、最大幅1.6m、奥壁幅1.4m、高さは現状で1.3mある。天井石・奥壁及び側壁の一部が欠損し、付近から側壁、天井石に使用されたと思われる石が検出されないことから、運び去られてしまったと考える。

玄室の基底部は、東側は横口積み・広口積みで二段目からは横口積み・小口積みをしている。西側は奥壁から1枚目と2枚目までは基底部から横口積み・小口積みで隙間なく丁寧に積み上げがされている。それ以外は横口積み・小口積みを採用し、側壁は基底部の石の大きさが一定しておらず、石室に安定感をもたせるために小振りの石も使用しながら積み上げを行っている。側壁の隙間は大きく、人頭大の石を詰め石として使用しているところも確認できた。

玄室と羨道との境は無袖であるためはっきりしていないが、閉塞石が置かれているところから羨門にかけては側壁において小振りの石を使用していることが確認できる。



第 8 図 中秣塚古墳平面図



第9図 中林塚古墳石室展開・礫床平面・エレベーション図

裏込めは側壁裏に根石を置き、5~30cm程度の石を裏込めとして使用している。石との間には粘土質の土が入り込んでいる。墳丘との境には人頭大の石をほぼ垂直に積み上げを行っている。

石室礫床

地形が水平でないため、旧表土の上に若干土をかぶせ地盤をある程度平に整形した後に、石室を形成している。礫床は二重になっており、地山に若干版築をした後に人頭大の平な割石を置き、土で床面の水平を保ったのちに拳ほどの石を敷き詰めている。このため西側の礫床は小礫のすぐ下から人頭大の平な割石が確認できた。遺物の数からみて追葬を行っているはずであるが、遺物は上部の礫床直上から出土しているため、当初から小礫が敷かれていたと考えられる。

羨道閉塞部については未調査のため礫床の有無については明らかではないが、前庭部にも礫床がみられること、赤坂台古墳群の他の調査でも確認されていることなどから羨道部にも礫床はあると推定する。

前庭部

前庭部は外側に向かって広がりを見せ、主軸付近が最も低く緩やかな「V」字状になっている。側壁は石室内のものとは比べると小振りの石を使用している。また、側壁を安定させるために掘り込みをいれる例があるが、この古墳にはみられない。前庭部の床面は小礫で覆われ、石室内とは異なり一重で構成している。小礫のため敷石としては不安定であるが、先に調査された赤坂台古墳群の竜王2・3号墳の前庭部も同様な礫の使用をしておりこの地域の特徴をみせている。

出土遺物

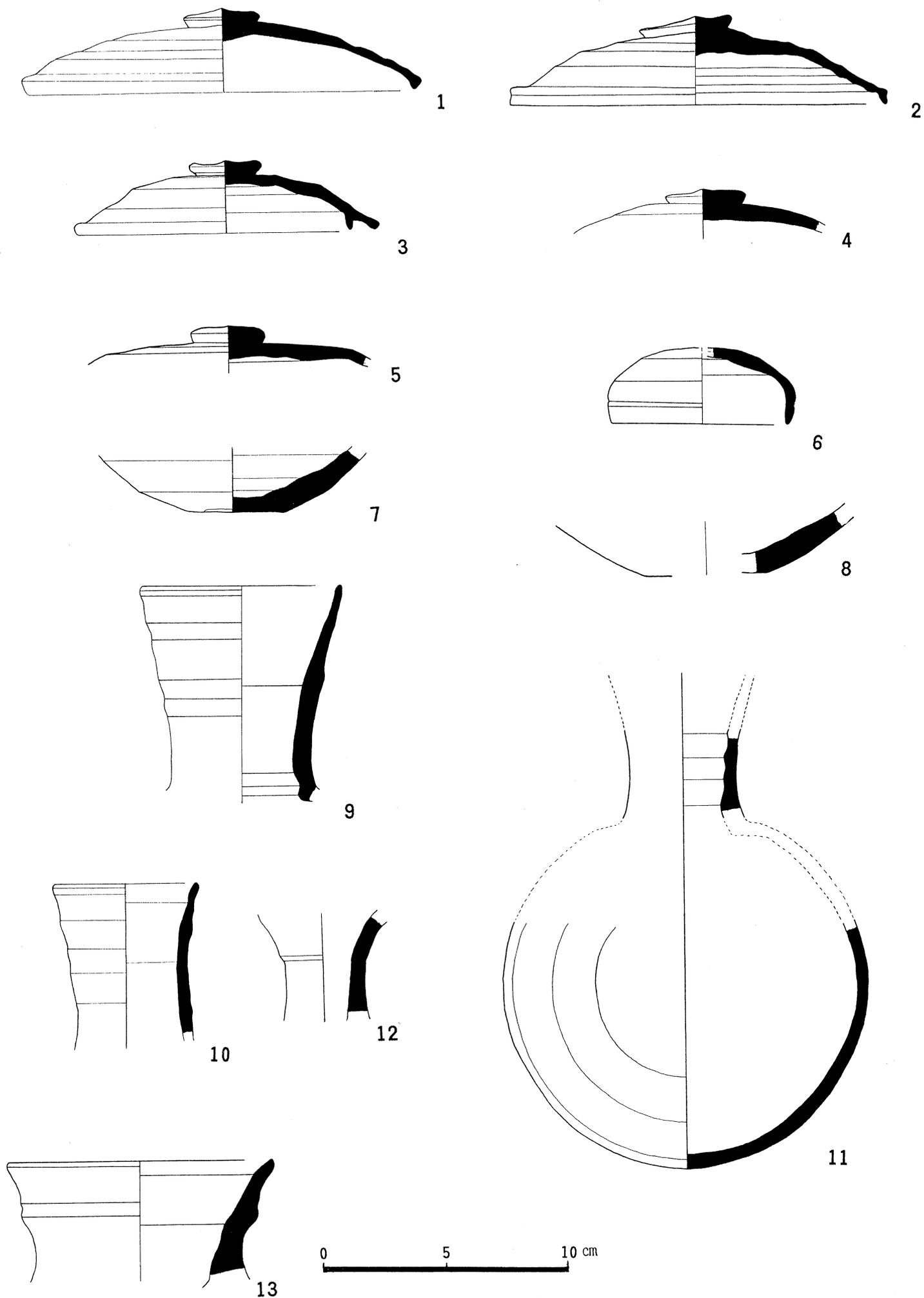
須恵器

この古墳の中で最も出土が多いのが須恵器である。ただし、完形品の出土はみられなかった。

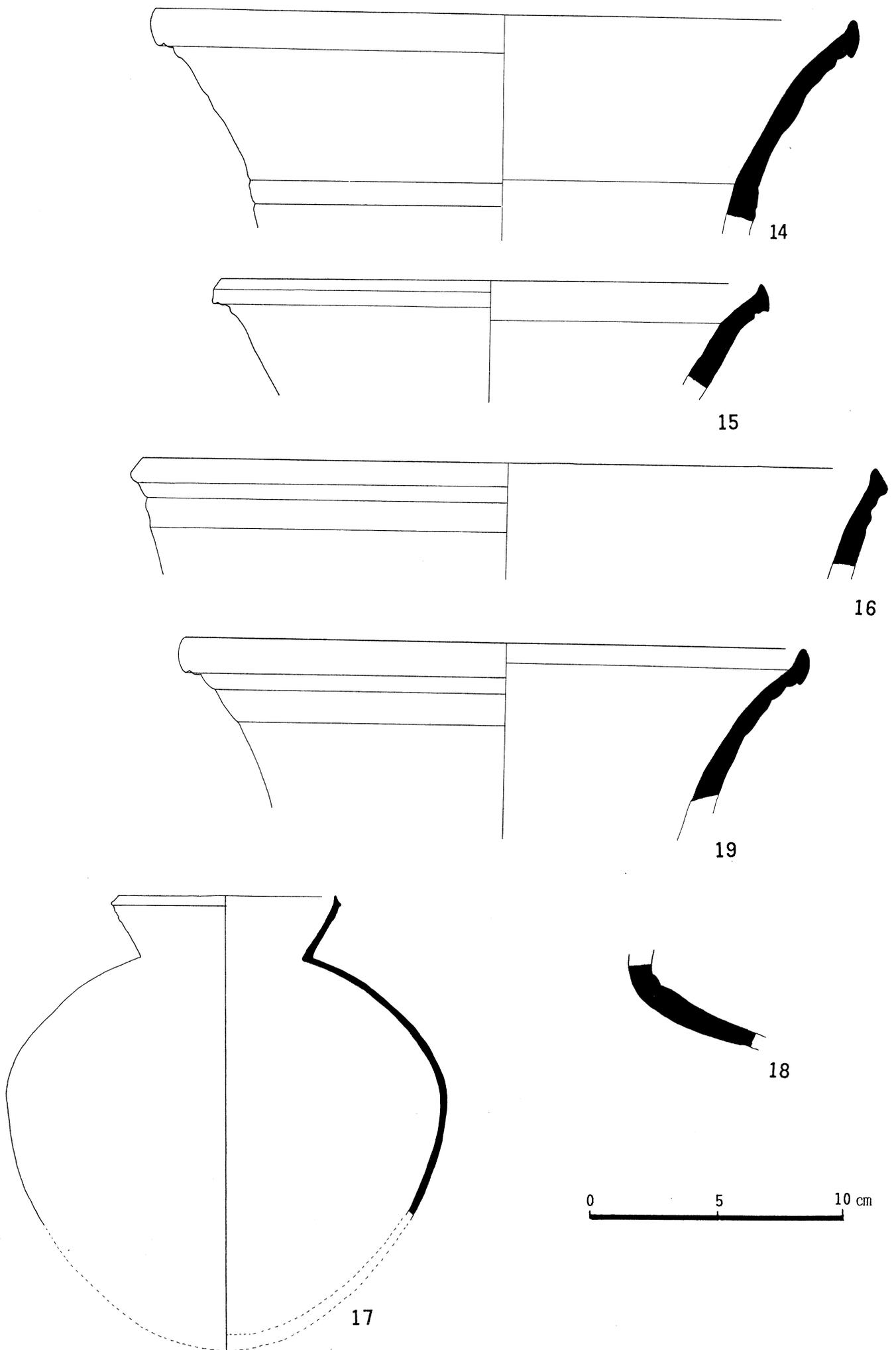
○蓋：蓋はつまみが付いているものとなないものに別けられる。つまみは平坦な宝珠がほとんどで、『長野県史』の須恵器編年ではこのつまみの形態を擬宝珠と呼び、突起状の宝珠形より年代が新しいと位置付けている。また、突起状のつまみの蓋が1点出土し、表面に緑茶系の自然釉を伴っている。1はほぼ完形で口径16.5cm、高さ3.5cmである。つまみは擬宝珠で、色調は灰色をし、表面は緑茶系の釉、調整は整形ナデ・篋整形をしている。宝珠形つまみは径3.1cm、高さ1.8cm。2は1/4が欠損。口径15.5cm、高さ3.7cmになり、つまみは擬宝珠。色調は灰色、焼成は良好で表面に緑茶系の釉がある。整形はナデ、篋整形。つまみは径3.8cm、高さ0.6cm。蓋とつまみの接合が不十分であったためか接合部分の破損が著しい。3は1/3欠損し、このつまみには「かえし」がある。擬宝珠で色調は灰色、焼成は良好であり、表面に緑茶系の釉があり、整形はナデ・篋整形である。4と5は蓋の上部のみが検出された。4の宝珠は径3.0cm、高さ0.7cm、5は径3.0cm、高さ0.75cmある。6はつまみを有せず、頂部は回転糸切り。色調は青灰色を呈する。

○坏：坏は蓋と対になるものはみられない。7は上部が破損し、現高2.8cm、底部4.9cmを測る。ナデ整形をしているが一部ケズリもみられる。内側底部には釉が付着している。8は坏の底部で、径は約4.2cm。

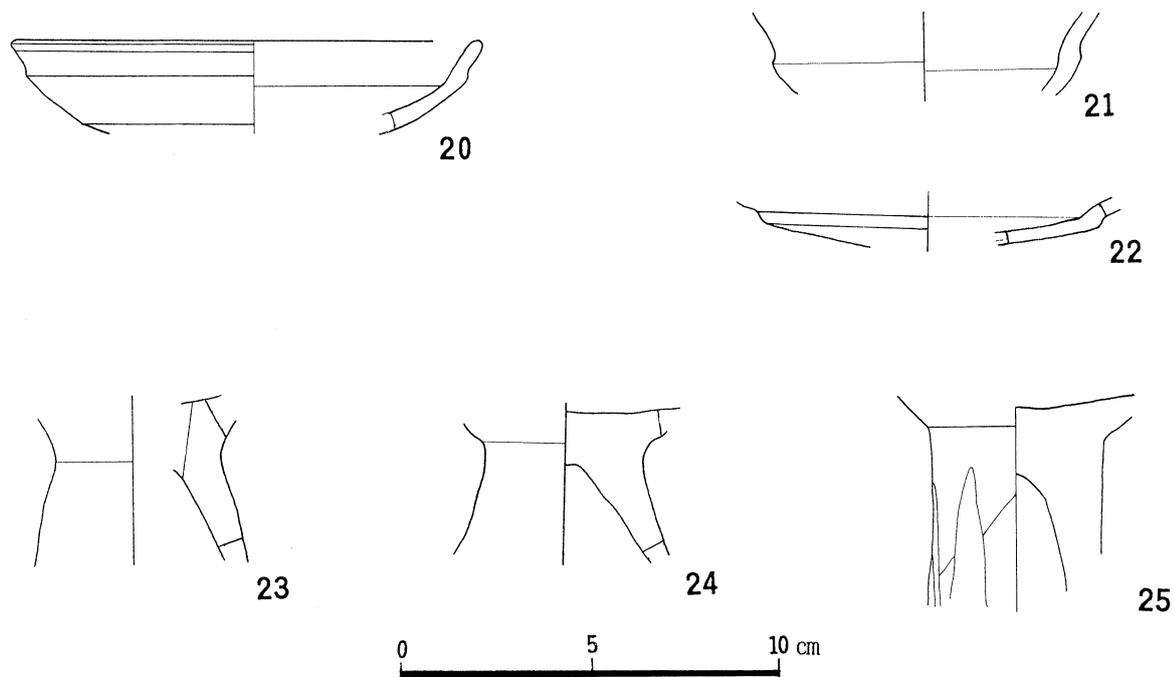
○提瓶：完形品はなく、口縁部から頸部と体部に分かれて出土し、両部分の接合面はみられない。また、ほとんどの提瓶片から緑茶系の釉が認められ、口縁部については内面に緑茶系の釉が認められるものが多い。すべてロクロ調整後に丁寧なヘラ調整を行っている。9と10は口縁部から頸部までで、9は口径10.2cm。色調は暗灰色で、緑茶系の釉が認められる。10は口径8.4cm。色調と釉は9と同じ。11は体部と頸部があるが、接合部分がない。体部の残存率はよく円形をし、体部の径は21.2cmを測る。口縁部は欠損している。13は口径6.0cmで体部は不明。内面には緑色釉がみられる。



第10図 中秣塚古墳出土遺物(須恵器)実測図



第11図 中秣塚古墳出土遺物(須恵器)実測図



第12図 中秣塚古墳出土遺物(土師器)実測図

中秣塚古墳出土土器一覽表

番号	器種	法 量 (口径×高さ×底部)	調 整	色	胎土・焼成・その他
1	蓋	16.5×3.5×	ナデ	青灰色	須恵器 胎・長石 表面・緑色釉 腹宝珠径3.1、高さ1.8
2	蓋	15.6×3.7×?	ナデ	青灰色	須恵器 胎・長石 表面・緑色釉 宝珠径3.8、高さ0.6
3	蓋	?×?×?		暗青灰色	須恵器 胎・長石、微量ながら石英含む 宝珠径3.3 高さ0.7、
4	蓋	8.6×3.2×?		暗青灰色	須恵器 胎・長石 つまみ径1.2 高さ1.2
5	蓋	?×?×?		明灰色	須恵器 胎・石英(雲母) 宝珠径3.0、高さ0.75 上部のみ現存
6	蓋	12.6×3.0×?		明灰色	須恵器 胎・長石 宝珠径・3.0 内面・暗灰色
7	坏	?×?×4.9	ナデ	暗灰色	須恵器 胎・長石 内面・釉あり
8	坏	?×?×4.2	回転糸切り、ケズリ	青灰色	須恵器 胎・長石、黒色粒子 現存高2.5
9	提瓶	10.0×?×?		暗灰色	須恵器 胎・長石、石英 内面・釉あり 口縁部
10	提瓶	8.4×?×?		明灰色	須恵器 胎・長石、黒色粒子含む 内面・緑色釉あり 口縁部
11	提瓶	?×?×?		暗灰色	須恵器 胎・長石
12	提瓶	?×?×?		暗灰色	須恵器 胎・長石
13	壺	11.0×?×?		明茶褐色	須恵器 胎・長石 外面・緑色釉 口縁部から頸部まで現存
14	甕	24.0×?×?	格子状たたき目あり	青灰色	須恵器 胎・長石 内面・波状痕あり NKD-P6
15	甕	×?×?	タタキ不十分のため割れている	明灰色	須恵器 胎・長石 変頸部
16	甕	×?×?		暗褐色	須恵器 胎・長石 焼・良 外面・釉、内面・線状痕 NDK-表採
17	甕	×?×?	タタキ	暗褐色	須恵器 胎・長石 焼・やや良
18	甕	30.0×?×?	タタキ	青灰色	須恵器 胎・長石
19	甕	25.0×?×?		青灰色	須恵器 胎・長石
20	高坏	12.2×?×?		褐色	土師器 胎・石英(雲母)、褐色粒子 焼・不良
21	高坏	?×?×?		茶褐色	土師器 胎・長石、石英、雲母 外反 鬼高式
22	高坏	?×?×?		褐色	土師器 胎・石英、雲母 外反 鬼高式
23	高坏	?×?×?	ケズリ	褐色	土師器 胎・長石、石英、雲母、褐色粒子 焼・不良
24	高坏	?×?×?	脚部ケズリ	褐色	土師器 胎・石英(雲母)、褐色粒子 焼・不良
25	高坏	?×?×?		褐色	土師器 胎・石英、雲母

○壺：12は口径11.0cm、体部は不明。内面には緑茶系の釉がある。

○甕：数個体あったことが判る。ほとんどが青灰色をし、火ぶくれが所々みられ空気抜きのためのたたきが不十分であったことがうかがえる。頸部から体部にかけて厚みが薄く、底部にいくほど厚みが増す。また、暗灰色・暗褐色をしたものもみられ、焼成が不十分なため断面中央部が褐色をしている。甕は頸部から体部にかけては緩やかな曲線を保ち、体部から底部にかけてはやや曲線的である。14は口径24.0cmを測る。色調は青灰色である。タタキが不十分であったためか空気の膨張、破裂などが多くみられる。一部に外面が明茶色をしている。破片は数多いが、接合面があわないため部分的に残るのみである。口縁部から頸部には櫛描き波状文、刺突文があるが、同型のもの出土していない。15は口径約18.0cm。色調は暗褐色。16は口径30.0cmを測るものの、体部については確認出来なかった。色調はにぶい暗褐色であるが、焼成は良好である。外面には刺突文がみられる、口縁部は須恵器編年末期の様相を呈す。17は口径26.0cm、高さ推定51.5cmの甕であり、口径部が7世紀前葉の形態をもつ。タタキ目は表面にのみ確認でき、内面は刷毛目がわずかに残る程度である。若干焼成が不良のためか、断面中央部が褐色になっている。甕の現存状況は悪くかなりの部分が欠損してしまっている。18は頸部。色調は暗褐色。19は口径約20.0cm。

土師器

土師器は28点出土した。焼成が不良のため口縁部と体部が部分的に残るのみでほとんど出土しなかった。20～22は高杯の坏部。20は口縁部が一部現存し、口径は推定12.2cmある。23～25はすべて高杯の脚部である。

武器

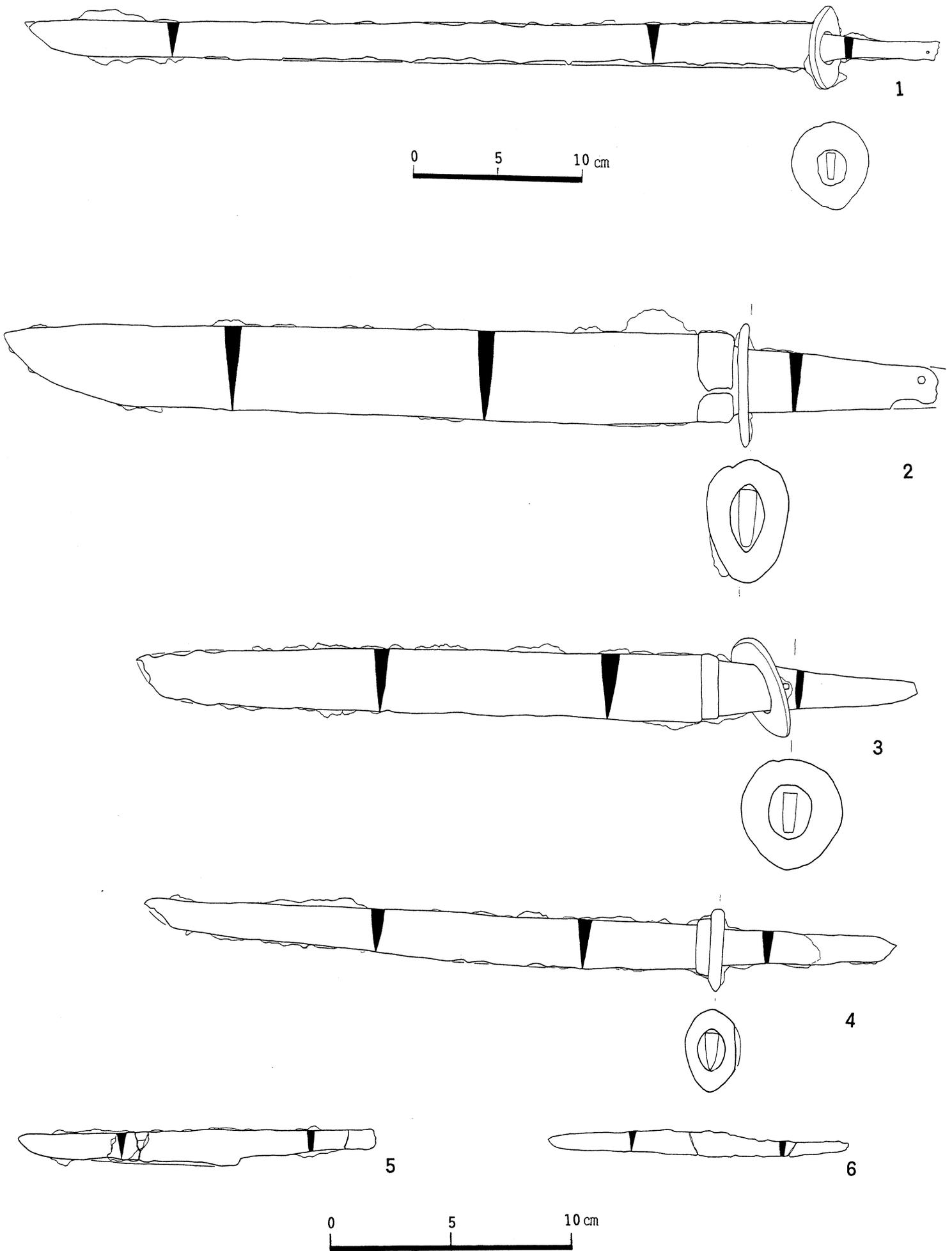
○直刀：直刀4本が出土し3本は石室西側より出土した。すべて両関有段式平棟平造で、このうち3本には茎端部に1～3mmの目釘孔がみられる。3には目釘も残っている。目釘孔の形は円形のものと同角のものがみられる。すべてのものに共通していることは茎部が閉塞部方向に向いていることである。1が全長60.5cmとこの古墳から出土した直刀の中では一番長く、奥壁東側から出土した。関幅2.6cm、厚さ0.7cmあるが、刀身部が錆のため細くなっている。目釘位置は柄端から1.0cm、幅0.1cmで型は円形である。鏝は倒卵形で縦5.0cm、横3.2cm。2は全長38.7cm、関幅3.6cmであるが、厚さが0.7cmあり刀の長さ甚至比厚身がある。目釘位置0.5cm、幅0.3cm、型は円形。鏝は倒卵形で縦5.1cm、横3.4cmある。3は全長32.4cm、関幅2.5cm、厚さ0.7cm、目釘位置5.5cm、幅0.2cm、鏝は倒卵形で縦3.6cm、横2.8cmある。4は全長31.2cm、関幅2.0cm、厚さ0.6cmあり、鏝は倒卵形で縦3.8cm、横2.1cm、2.3cmを測る。2～4は西側側壁付近のほぼ同じ位置からの出土である。

○刀子：石室床面直状から2点出土した。5は折れていた程度であったが、6は砕けていた。5は全長14.8cm、関幅1.5cm、茎部5.7cm、刀身9.1cm。6は全長12.2cm、関幅1.2cm、茎部5.0cm、刀身7.2cm。

○鉄鎌：鉄鎌は、石室西側から奥壁に集中して出土し、特に直刀の回りから多く出土した。鉄鎌は38点がすべて尖根式で、このなかで完形品はほとんどなく茎部が欠損している。7～16までが棘篋被片関片刃箭式、17～26が関無片丸造棘篋被鑿箭式、27・28が棘篋被端片刃箭式であるが27は圭頭で28が円頭式である。茎部しかないものなど不明な鎌は16点あった。(別表)

装飾品

○金環：金環は7点出土した。このうち2点が前庭部から出土している。保存状態は小さいものほど悪い。石室内での検出状況も細かい礫床の直上、礫床の間から出土したもの、また、前庭部から出土したものなどがあるが、状態や大きさなどから対になるものは確認できた。いずれも袂部のある環形で、青銅に鍍金している。4は



第13図 中秣塚古墳出土遺物(直刀・刀子)実測図

金屬製品出土遺物一覽表

單位 cm

番 号	器 種	法 量	形 式	備 考
1	直 刀	全長60.5 高2.6 厚3 (鑄)縱	兩関有段式平棟平造	目釘孔位置1.0 目釘幅0.1 目釘型、円形
2	"	全長38.7 高3.6 厚0.7 (鑄)縱5.1 横3.4	兩関有段式平棟平造	目釘位置0.5 目釘幅0.3 目釘型、円形
3	"	全長32.4 高2.5 厚0.7 (鑄)3.6 横2.8	兩関有段式平棟平造	目釘位置5 目釘幅0.2 目釘型、円形
4	"	全長31.2 高2.0 厚0.6 (鑄)3.8 横2.1	兩関有段式平棟平造	目釘なし
5	刀 子	全長14.8 高1.5 刃9.1	兩 関 有 段 式	
6	"	全長12.2 高1.2 刃7.2	兩 関	
7	鉄 鏃	全長12.9	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
8	"	全長14.7	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
9	"	全長14.3	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
10	"	全長3.6	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
11	"	全長12.4	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
12	"	全長13.0	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
13	"	全長14.0	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
14	"	全長	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
15	"	全長	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
16	"	全長	尖根式	棘筥被片関片刃箭式
17	"	全長16.3	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
18	"	全長11.8	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
19	"	全長11.95	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
20	"	全長12.5	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
21	"	全長13.8	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
22	"	全長14.0	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
23	"	全長9.0	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
24	"	全長15.1	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
25	"	全長15.0	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
26	"	全長	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
27	"	全長12.4	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
28	"	全長6.0	尖根式	関無片丸造棘筥被鑿箭式
29	"	全長		茎部
30	"	全長		茎部
31	"	全長		茎部
32	"	全長		茎部
33	"	全長		茎部
34	"	全長		茎部
35	"	全長		茎部
36	"	全長		茎部
37	"	全長		茎部
38	"	全長		茎部
39	"	全長		茎部
40	"	全長		茎部
41	"	全長		茎部
42	"	全長		茎部
43	"	全長		茎部
44	"	全長		茎部
45	金 環	徑2.0x1.9		
46	"	徑2.0x1.9		
47	"	徑1.9x1.7		
48	"	徑1.6x1.5		
49	"	徑1.6x1.4		
50	"	徑1.6x1.4		
51	"	徑1.6x1.4		

径縦1.4cm・横1.6cm。45は径縦1.4cm・横1.65cm。46は径縦1.4cm・横1.65cm。47は径縦1.5cm・横1.65cm。48は径縦1.7cm・横1.9cm。49は径縦1.9cm・横2.0cm。50は径縦1.9cm・横2.05cm。

○ガラス玉：直径4mm程の小玉で1mm位の穴がある。色調は青で鉛ガラスと思われ、71点出土した。出土状況は、礫床直上か礫床の間からの出土である。石室内の一括出土ではなく、ほとんどがふるいによる検出であった。1～71（別表）

○その他の遺物

石室覆土から銅銭が3点出土している。このうち「熙寧元寶」（鑄1068年）が完形で出土した。「熙寧元寶」は北宋時代に鑄造されたもので、渡来銭（輸入銭）のなかでも全国で多く出土している。「口道元寶」については宋の時代であれば「至道元寶」（鑄995年）、「明道元寶」（鑄1032年）の2種類しかないため、このどちらかであり、「口口元口」については不明である。中世において中秣塚古墳を信仰の場とした奉納銭であろうか。

考 察

○墳丘

当初、古墳は全面が礫に覆われていたため、積石塚古墳の可能性もあるとも考えられたが、調査の結果、天井石、側壁の一部が取り除かれていることから、裏込めが表面に流出したものと、さらに後世に礫が積み上げられて積石塚古墳に見えたにすぎない。西側墳丘端からも葺石のような小礫が列石にかけて検出したが、長野県長野市大室古墳群のように墳丘内部が土石混合ではなく、西側墳丘端以外からは礫が検出されなかった。

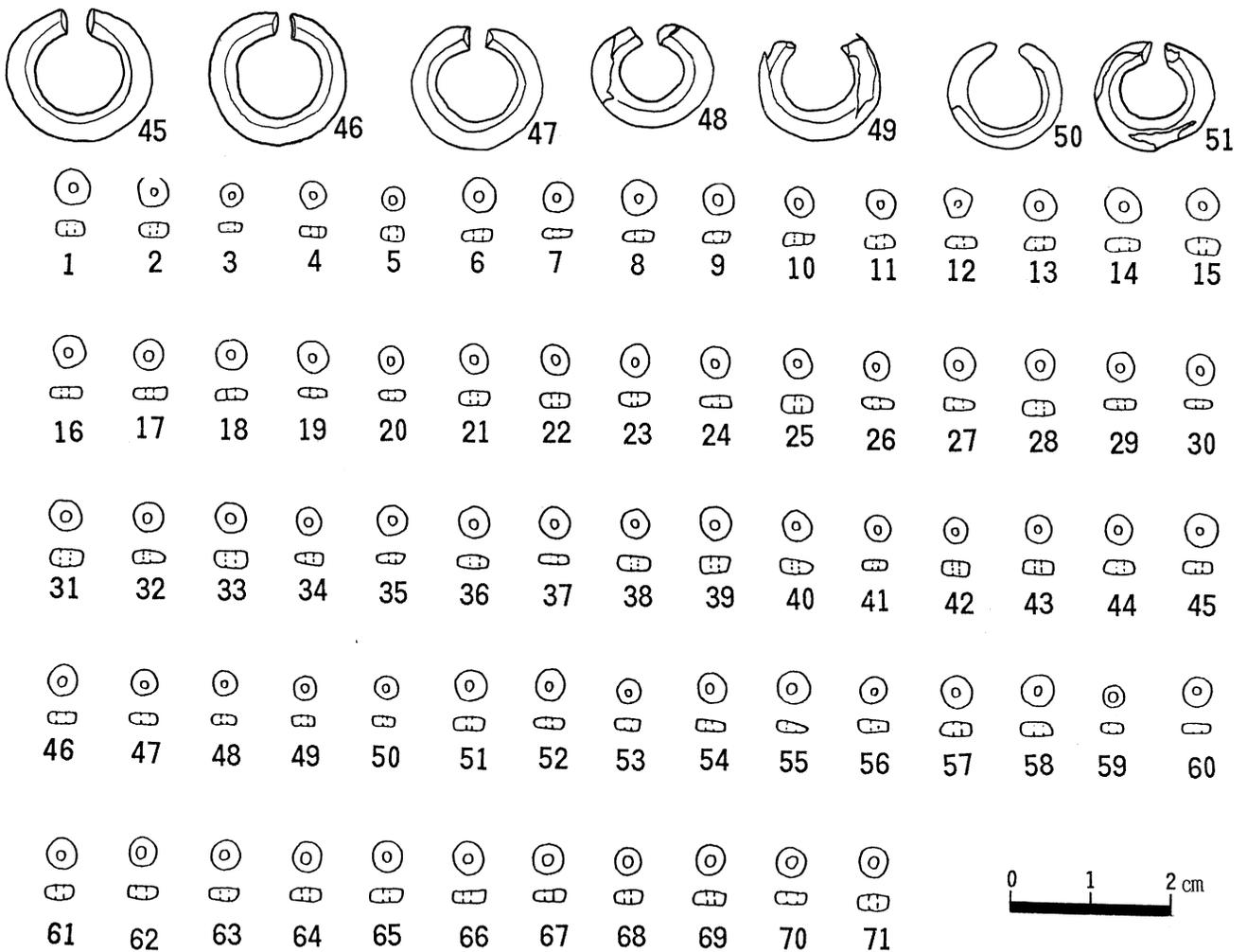
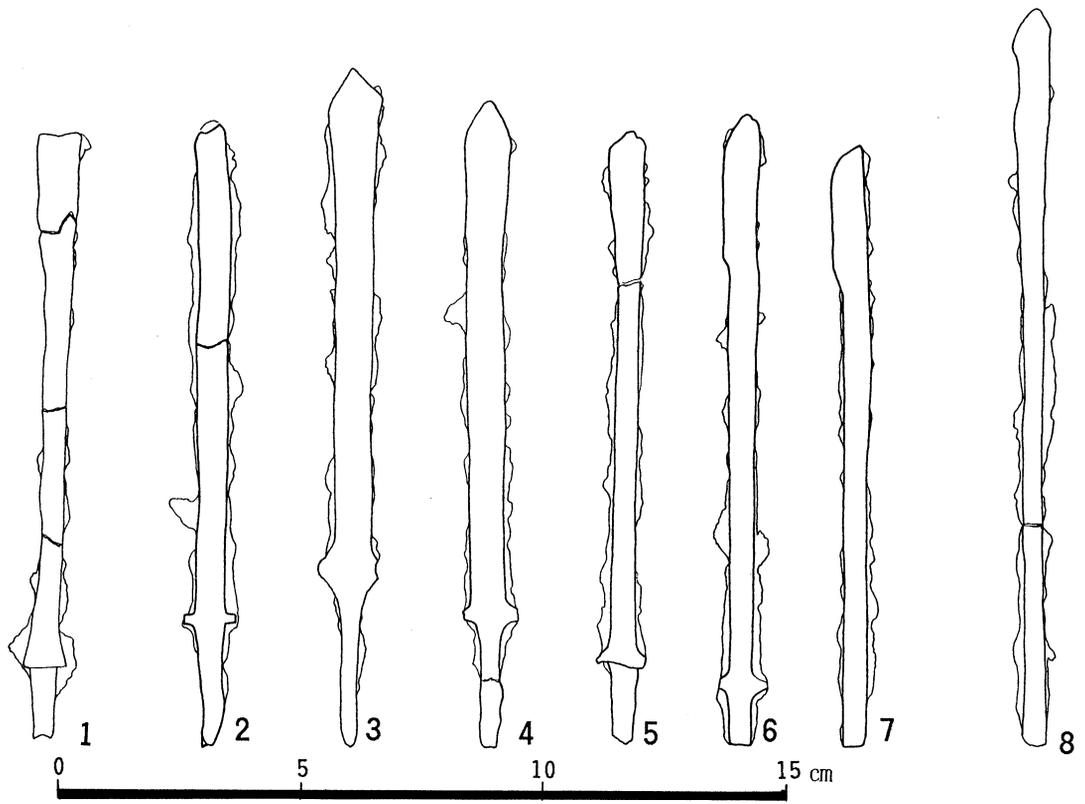
○内部構造

中秣塚古墳は無袖台形状の長方形の形態をもつ横穴式石室で、奥壁と接している側壁の1枚目は小口積みを採用し、東側3枚目最下部は広口積みとしている。石材は付近から検出できる岩（礫）を割石して側壁に使用しているが、山石のため礫の大きさは一定でなく、2段目からは形を整えながら積み上げを行い、結果として乱雑な積み方になっている。1978年に調査された赤坂台古墳群の二ツ塚1号墳、竜王2号墳なども同様の積み上げを行っており、側壁に使用している礫の加工は丁寧とはいえ側壁との間に隙間が顕著にみられる。その反面、閉塞部及び奥壁に接している部分についてはきれいに積み上げを行っている。

石室の形態は無袖のため玄室と羨道との区画が明確ではない。このことについては、双葉2号墳の報告書の中で、「羨道部が短小化、簡略化されているものが多くみうけられ、～略～石室内の空間的な区画を取り除いた古墳として、本地域の特色のある石室形態として把握できるであろう。」ことがあげられており、側壁が乱雑に積み上げられているために羨道との区分ができないという点において、中秣塚古墳についても同様のことがいえる。しかしながら、礫床が閉塞石から約50cm入り込んだところで礫の大きさに変化がみられ、奥壁側は30cm程度の礫を使用し、閉塞石から約50cmまでは10cm程度の礫を敷いているところに注目したい。

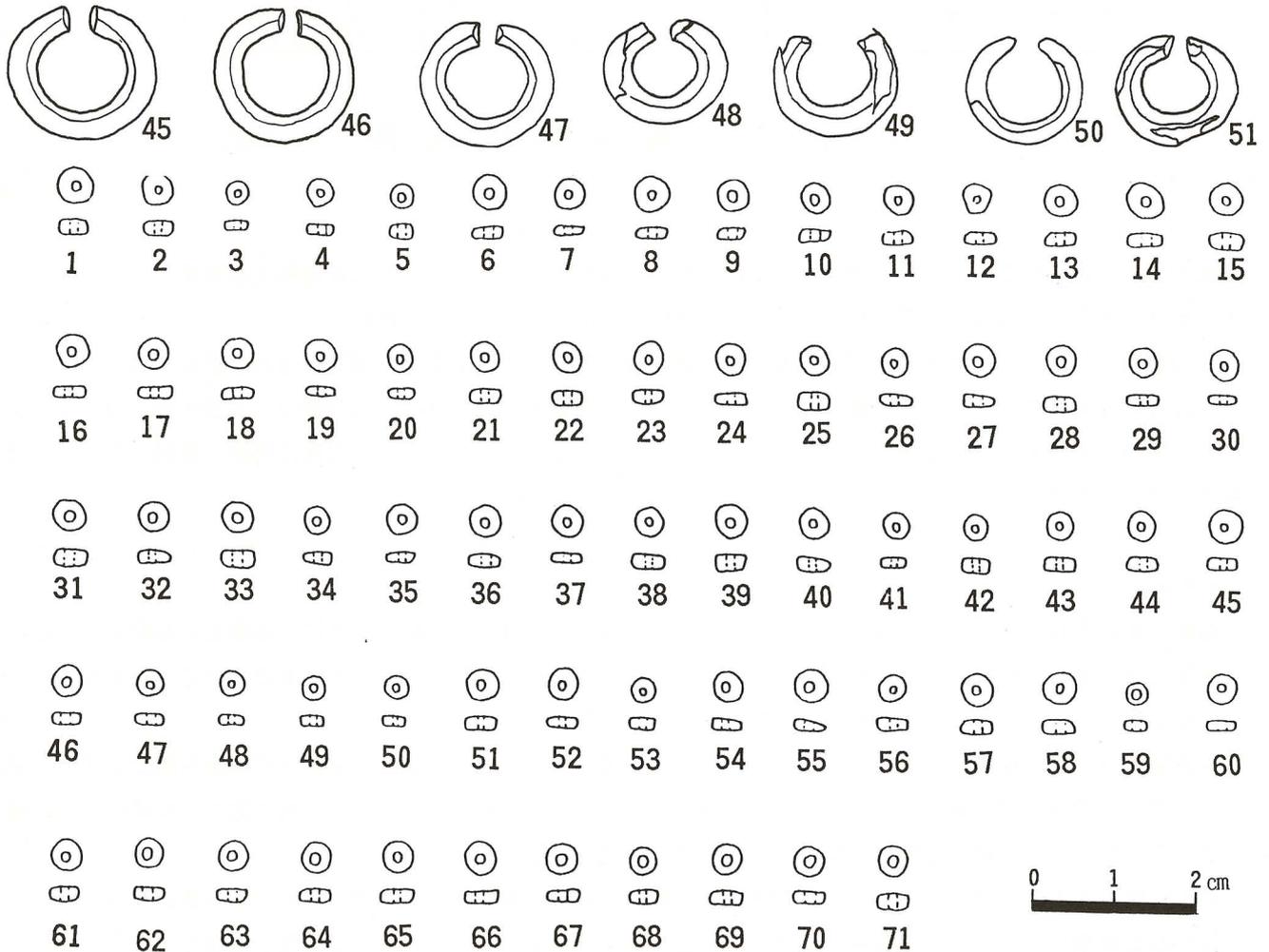
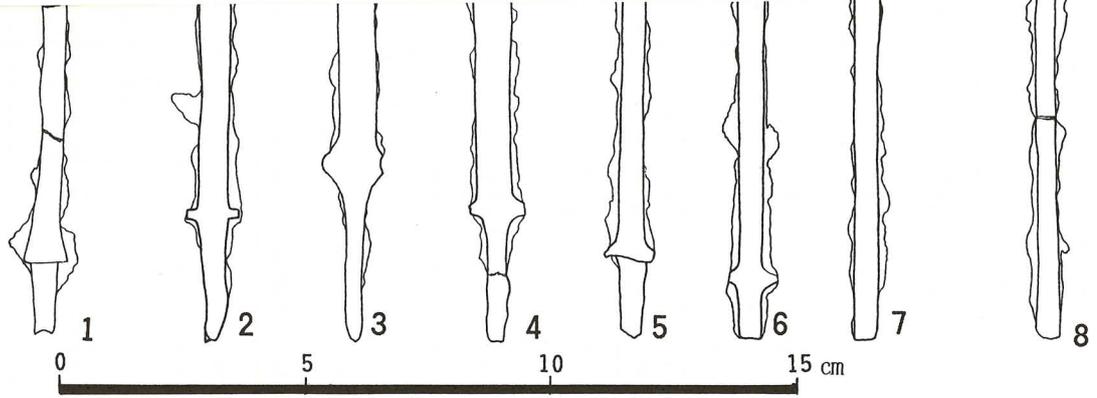
赤坂台古墳群の石室はすべてやや胴張りを呈している。この形態の石室構造は袖の有無にかかわらず、群馬県で多くみられる。埼玉県、栃木県などでは内部の張りが極端に広くなり、石室が円形にちかいかものもある。このため中秣塚古墳は関東地方の影響をうけているとは考えられない。また、通説では袖を有するものは構築年代が古く、無袖が横穴式石室形態の最終形態であるといわれ、確認されているすべての石室が無袖を呈する古墳群は赤坂台古墳群だけであり、県内の他の群集墳は両袖や片袖のものが混在して古墳群を形成している。

石室を構成している石材は、『山梨県地質誌』（1971）によると、暗灰色の緻密で粒子が細かい複輝石安山岩で、第四紀更新世に形成された茅ヶ岳の葺崎岩屑流によって赤坂台地まで運びこまれたものと考えられる。また、若干ではあるが八ヶ岳山系の粒子が粗い暗灰色の輝石安山岩も使用している。やはり岩屑流によって赤坂台地付



第14図 中秣塚古墳出土遺物(鉄鏃・ガラス玉・金環)実測図

誤	19ページ最下段～22ページ2段目	4 は径縦1.4cm・横1.6cm。4 5は径縦1.4cm・横1.65cm。4 6は径縦1.4cm・横1.65cm。4 7は径縦1.5cm・横1.65cm。4 8は径縦1.7cm・横1.9cm。4 9は径縦1.9cm・横2.0cm。5 0は径縦1.9cm・横2.05cm。
正	19ページ最下段～22ページ2段目	4 5は径縦1.9cm・横2.0cm。4 6は径縦1.9cm・横2.0cm。4 7は径縦1.7cm・横1.9cm。4 8は径縦1.5cm・横1.6cm。4 9は径縦1.4・横1.6cm。5 0は径縦1.4・横1.6cm。5 1は径縦1.4・横1.6cm。



第14図 中秣塚古墳出土遺物(鉄鏃・ガラス玉・金環)実測図

番号	質	径	厚	色	番号	質	径	厚	色	番号	質	径	厚	色
1	ガラス	4	1.5	青	25	ガラス	4	2	青	49	ガラス	3	1	青
2	〃	4	2	青	26	〃	4	1.5	青	50	〃	3	1	青
3	〃	3	1	青	27	〃	4	1.5	青	51	〃	4	1.5	青
4	〃	3.5	1.5	青	28	〃	4	2	青	52	〃	4	1	青
5	〃	3	1.5	青	29	〃	4	1.7	青	53	〃	3.5	1.5	青
6	〃	4	1.5	青	30	〃	4	1	青	54	〃	4	1.2	青
7	〃	4	1	青	31	〃	4	2	青	55	〃	4	1.5	青
8	〃	4.2	1	青	32	〃	4	1.5	青	56	〃	3.5	1	青
9	〃	4	1	青	33	〃	4	2	青	57	〃	4	1.5	青
10	〃	4	1.5	青	34	〃	3.5	2	青	58	〃	4	1.5	青
11	〃	4	1.5	青	35	〃	4	1	青	59	〃	3	1	青
12	〃	4	1.5	青	36	〃	4	1.5	青	60	〃	4	1.2	青
13	〃	4	1.5	青	37	〃	4	1	青	61	〃	4	1.5	青
14	〃	4.5	1.5	青	38	〃	4	2	青	62	〃	4	1.2	青
15	〃	4.5	2	青	39	〃	4	2	青	63	〃	4	1.2	青
16	〃	4	1.5	青	40	〃	4	2	青	64	〃	4	1	青
17	〃	4	1.5	青	41	〃	3.5	1	青	65	〃	4	1.5	青
18	〃	4	1.5	青	42	〃	3.5	2	青	66	〃	4	1.5	青
19	〃	4	1	青	43	〃	4	1.5	青	67	〃	4	1	青
20	〃	3.5	1	青	44	〃	4	1.5	青	68	〃	3.5	1.5	青
21	〃	4	1.5	青	45	〃	4	1.2	青	69	〃	4	1.5	青
22	〃	4	2	青	46	〃	4	1.5	青	70	〃	4	1	青
23	〃	4	2	青	47	〃	3.8	1	青	71	〃	4	2	青
24	〃	4	1.5	青	48	〃	3.5	1	青					

中 秣 塚 古 墳 玉 類 計 測 表

単位mm

近まで流されたものを使用したと考えられるが、付近の古墳からは八ヶ岳山系の礫は検出されず、赤坂台地からも八ヶ岳山系の安山岩は通常みられず、茅ヶ岳の複輝石安山岩に比べ粒子が粗い。

この古墳の特色としては横穴式石室の礫床が二層になっていることである。通常は追葬に際して敷石の上に新たに石を敷き直すことが多く、一層目の敷石直上からも遺物が出土する。本古墳の場合、下段からはガラス玉数点と金環が1点出土したにすぎず、当初から二層構造であったと考えられるが、付近に同様の事例がないため報告だけにとどめておく。

○前庭部

前庭部が石室から扇状あるいは「八」字状に広がりをもつ古墳は、赤坂台古墳群では竜王2号墳があるが、中秣塚古墳は竜王2号墳に比べ東西が平行に延びている。赤坂台古墳群でこれまでに確認されている古墳の前庭部には現在のところ一貫性がみられない。

中秣塚古墳と形状が類似しているのは長野県岡谷市唐櫃石古墳で、敷石はないが前庭部は本古墳と同様に石室からほぼ直線で前庭部を構成している。甲府盆地でこのような形態をもつ古墳は、無袖型としてはほとんど確認されていない。二ツ塚1号墳の前庭部については、県内では類例が見られない。

敷石は付近の古墳と同様に10cm以下の礫を使い敷いてある。側壁は広口の積み方をしているが、石室の側壁に比べるとかなり小さいものを使用している。また、側壁は窪みをつくって固定した様子はなく、ただ置いただけである。

○裏込め

裏込めは、拳大の礫のものが中心で不規則に60cm程度の礫を配していた。とくに側壁根石部分には側壁と同程度の礫を配している。礫の混入している部分は下へ行くほど狭まる。また、裏込めと墳丘との境には人頭大の礫を中段から垂直に積み上げを行っているが、これは裏込めの流出防止のために積み上げていると考えられ、この部分についてはかなり密に礫を配している。

○古墳群のグループ

赤坂台古墳群は古墳の分布状況から3つの支群に分けられる。赤坂台地の東部を二ツ塚支群、南部を狐塚・西山支群、南西部を中秣塚支群に大別し、支群のなかでも数基単位で密集しているものを小支群として分類する。赤坂台古墳群の場合、2～3基単位での密集である。古墳の形態も二ツ塚支群と中秣塚支群では差異がみられ、前庭部、礫床などが明確に違った形態をみせる。

現在、赤坂台古墳群の現存数が極めて少なく、本格的な調査も二ツ塚支群の4基が行われたにすぎないため、古墳の形態、変遷を知るうえで狐塚・西山支群がどのような形態のものなのか、今後の調査に期待したい。

○出土遺物

石室の遺物状態は、敷石から10～20cmまで礫が混入していない埋土であり、後世に荒らされた形跡はほとんどなく、天井石・奥壁が抜き取られた程度で、盗掘にあった可能性は薄い。

金属製品では直刀、鉄鏃、金環、刀子が出土した。赤坂台古墳群の出土品との違いは馬具と関連する製品は中秣塚古墳からまったく出土しなかったことである。甲府盆地にみられる群集墳のなかでも赤坂台古墳群は馬具の出土件数は多く、中秣塚支群の四ツ塚古墳でも轡の出土が確認されている。赤坂台古墳群のなかで馬具の検出がみられなかったのは、報告されている古墳では中秣塚古墳だけである。

鉄鏃の形式は双葉2号墳と同様で、すべての鏃が実用的な尖根式で、尖根式は古墳中期から終末期にかけて特に多くみられ、装飾性の強い平根式は出土しなかった。末木健氏は、二ツ塚2号墳・双葉2号墳の報告書のなかで、「尖根式のみ鉄鏃の出土の場合、埋葬者は武人的色彩が強いことが観察される」と記述している。四ツ塚古墳群をみると、4号墳は出土した鏃の半数以上が平根式であるのに対して、2・13号墳はすべて尖根式であり、2・13号墳が軍事的役割を持っていたことになる。しかし、古墳の規模からみると4号墳は四ツ塚古墳群のなかでも最大規模を有しているものの、13号墳は最小規模の古墳に属することから、鏃の形式で被葬者の権力までは推測することは難しいのではないかと推測する。

6世紀中期以降には地方にも多くの古墳が築造されるようになり、それに伴って須恵器が各地でも盛んに生産されるようになり、須恵器のもつ意味は政治的な結び付きから経済的関係が重要視されていく。須恵器は前庭部からほとんどが出土し、流出や追葬時に石室のなかへ入り込んだと考えられるものが数点あるだけで、前庭部の中央部を中心に散乱し全面を覆っていた。赤坂台古墳群のなかで現在確認されている古墳の中では最も多く出土している。二ツ塚支群でみられるように中秣塚古墳でも須恵器、土師器の完形での出土はなくすべて割れていた。また、須恵器の状態も類似し、軟質な胎土のもの、焼成不足で断面中央部が赤褐色になっているもの、火ぶくれして欠けているものなどがあり、生産地が同じであることがうかがえる。須恵器のなかで擬宝珠形のつまみ付きの蓋が多く出土し、『長野県史』によると擬宝珠形のつまみ付きの蓋が検出されるのは、7世紀第1四半期からみられ、8世紀まで検出されている。

付近の古墳と中秣塚古墳との出土遺物の違いがなにに起因するのかは今後の研究によって明らかにしていきたい。

第5節 中秣塚古墳まとめ

赤坂台古墳群の調査は1978年に中央自動車道路の開発に伴う古墳の調査が行われてから今回の調査まで本調査はなく、この間、甲府盆地の各地では東八代郡を中心として群集墳あるいは単一古墳の調査が行われている。

盆地の一部に伝播した大形古墳がやがて各豪族に波及し、盆地東部を中心として多くの古墳が構築されていく。このことについては、大形の古墳から小形の古墳への変遷は、各豪族単位での古墳構築を示していると考えられる。

中秣塚古墳を含めた赤坂台古墳群をひとつの墓域としてとらえた場合、広範囲にわたって点在している。赤坂台古墳群は支群が離れ、中秣塚古墳と二ツ塚2号墳では直線にして約800mほど離れており、その間に狐塚・西山支群が分布し、横根・桜井積石塚古墳群、四ツ塚古墳群のように密集して構築されていない。また、横根・桜井積石塚古墳群の場合、範囲は広いものの大小合わせて140基以上の古墳が確認されている。

敷島町は以前から方形周溝墓が確認された金の尾遺跡があり、最近では古墳時代の住居跡も松の尾遺跡で確認されている。この時代の集落は最低でも約200m～400m離れた所に住居を構えていたと考えた場合、住居を構えるのに適しているところは古墳から最も近いところでは台地の先端部になるが、本町ではこの時代の遺跡は残念ながら確認できない。松の尾遺跡からは貢川を挟んで直線で約1kmの距離にあることを考えると場所としては可能である。

中秣塚古墳の石室内の形態は考察でも述べたが、長野県岡谷市の唐櫃石古墳と類似している点が多く、石室がやや胴張りで前庭部がほぼ直線の形状をみせている。また、二ツ塚1号墳と同様の形態をみせる前庭部が群馬県古墳で確認されていることなどから、赤坂台古墳群は北部あるいは西部からの影響を受けた古墳であると考えられる。

赤坂台古墳群の中で中秣塚古墳だけが馬具が検出されなかったが、鉄鏃は実用性の強い尖根式だけが出土した。また、須恵器、鉄鏃など付近の古墳に比べ出土数が最も多いが、追葬を考慮すると、副葬品としてはそれほど多くなかったと考えられ、最低でも半世紀は使われていたものとする。

赤坂台古墳群には未調査の古墳が残っており、これらの調査を行うとともに周辺遺跡との関係を明らかにしていきたい。この古墳は調査終了後に平成8年(1996)9月23日町の指定を経て、県の史跡として平成8年(1996)11月7日に指定をうけ、今後保存整備を行っていく計画である。閉塞部は未調査であり、今回の報告書についても説明が不足している部分があるため、中秣塚古墳の保存整備の報告と併せて調査、報告したい。

参考文献

- 末木健他 1978 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内1—』 山梨県教育委員会
末木健他 1979 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内2—』 山梨県教育委員会
末木健他 1987 『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚) 山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 山梨県教育委員会
小林広和 1987 『四ツ塚古墳群 山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 山梨県教育委員会
山梨県地質図編集委員会 1970 『山梨県地質誌』 山梨県
大野良明・依田金晴 1936 「龍王村篠原丘上の古墳群」 『中巨摩郡郷土研究』 山梨県中巨摩郡聯合教育会
長野県史刊行会 1982 『長野県史考古資料編』 長野県
末木健他 1986 『大塚古墳』 敷島町教育委員会
須坂市本郷大塚古墳発掘調査団 1992 『本郷大塚古墳』 須坂市教育委員会
山本寿々雄 1968 『山梨県の考古学』 吉川弘文館
宮坂光昭他 1976 『唐櫃石古墳、姥ヶ懐古墳』 長野県岡谷市唐櫃石古墳(赤彩横穴式石室墳)及び姥ヶ懐古墳発掘調査報告書
和田博、鈴木直人、山口明 1986 『大室25号墳移築復原の記録』 長野市教育委員会
山梨学院大学考古学研究会・十菱駿武 1988 『龍王町の遺跡—龍王町遺跡詳細分布調査報告—』 龍王町教育委員会
池上悟 1982 「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の諸問題」 『東京考古』
坂本・末木・堀内 1983 「奈良・平安時代土器の諸問題—甲斐地域」 『神奈川考古』 第14号
江坂・芹沢・坂詰 1983 『日本考古学小辞典』 ニューサイエンス社

報告書抄録

ふりがな	あかさかそふとぱーくないせきぐん・よつしいせき					
書名	赤坂ソフトパーク内遺跡群・四ツ石遺跡					
副書名						
巻次						
シリーズ名	竜王町埋蔵文化財報告書					
シリーズ番号	第1集					
編著者名	皆川洋					
編集機関	竜王町教育委員会					
所在地	〒400-01 山梨県中巨摩郡竜王町篠原2610 Tel.0552-76-2111					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
おおはらみなみいせき 大原南遺跡	山梨県中巨摩郡 竜王町大字竜王 新町字大原、 氏神西			19940509 ～19940720 19940907 ～19960624	6,276㎡	赤坂ソフトパーク 第2期開発に伴う 試掘調査
なかまきいせき 中秣遺跡	大字竜王字狐塚					
なかまきづかごふん 中秣塚古墳	四ツ石、中秣					
まるやまごふん 丸山古墳						
よつしいせき 四ツ石遺跡	山梨県中巨摩郡 竜王町大字竜王 字四ツ石			19940721 ～19940901	270㎡	特別養護老人ホーム 建設に伴う試掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
大原南遺跡	散布地	近世	溝状遺構	土師質土器 石器・須恵器 土師器 灯火器		
中秣遺跡	散布地	中近世	土坑	銭貨 かんざし		
四ツ石遺跡	散布地	中近世		ほうろく 石器		
四ツ石塚古墳	古墳	古墳時代		須恵器 鉄製品		
中秣塚古墳	古墳	古墳時代	古墳 溝状遺構	土師器 須恵器 金属製品 銭貨		



遠景 南から



土層



試掘調査風景



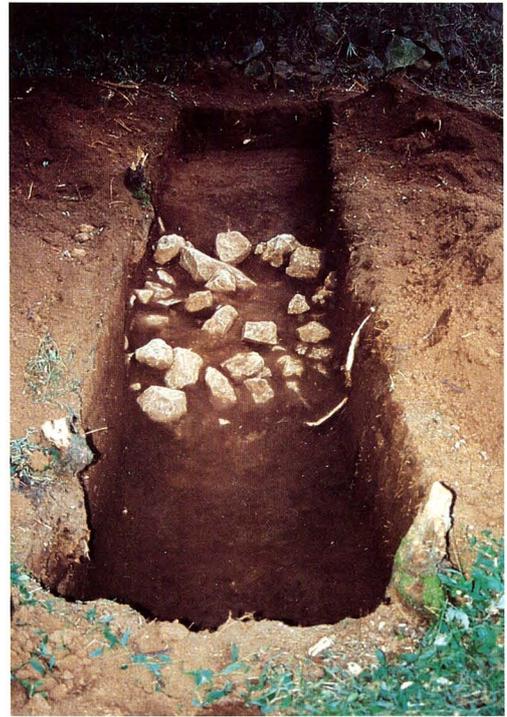
赤坂ソフトパーク (業務用地) 灯火器 (ひょうそく) 出土状況



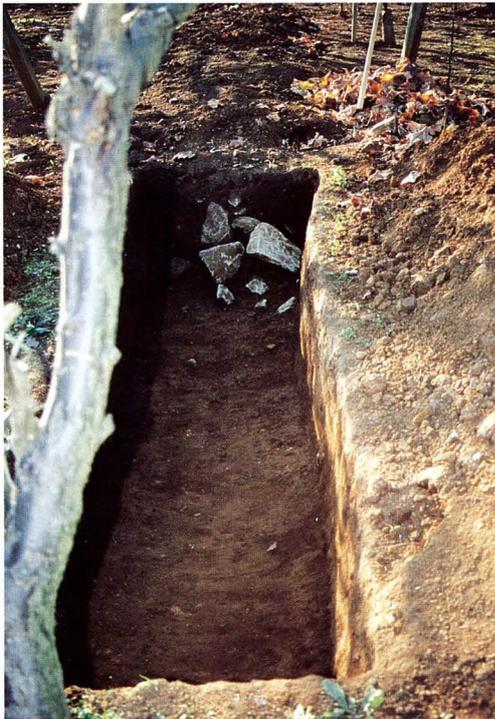
赤坂ソフトパーク (業務用地) 11トレンチ溝状遺構



中秣塚古墳西側トレンチ



中秣塚古墳西側トレンチ内集石状況



丸山古墳トレンチ南から



丸山古墳トレンチ内集石状況



赤坂ソフトパーク（公園用地）溝状遺構

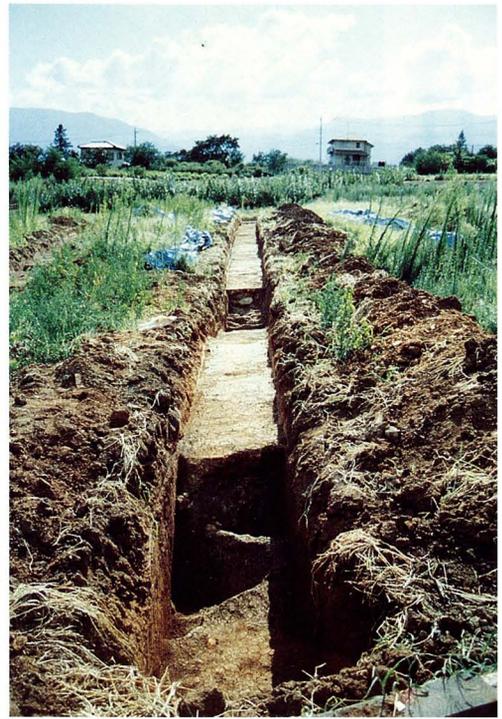


赤坂ソフトパーク（公園用地）溝状遺構

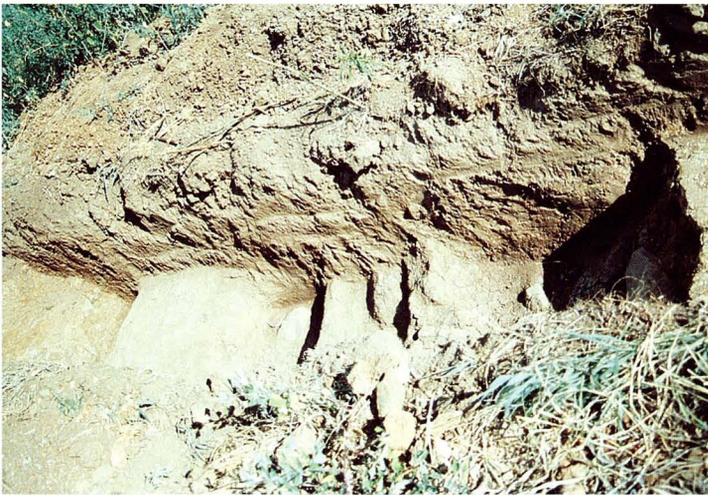
四ツ石遺跡



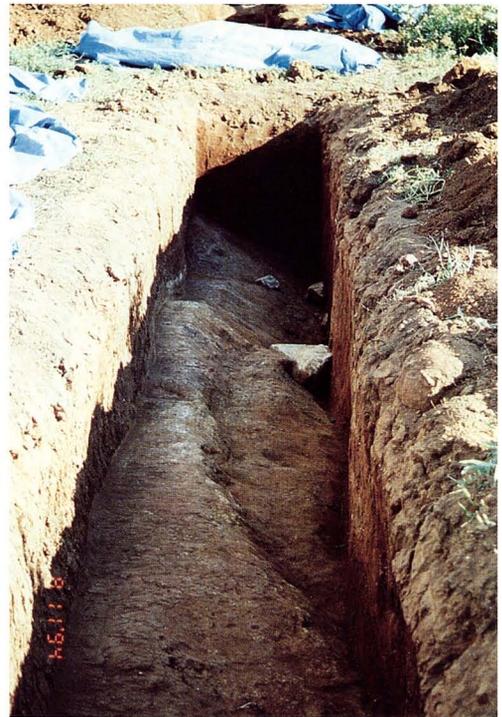
2 トレンチ西から



4 トレンチ東から



4 トレンチ内溝状遺構



6 トレンチ内溝状遺構

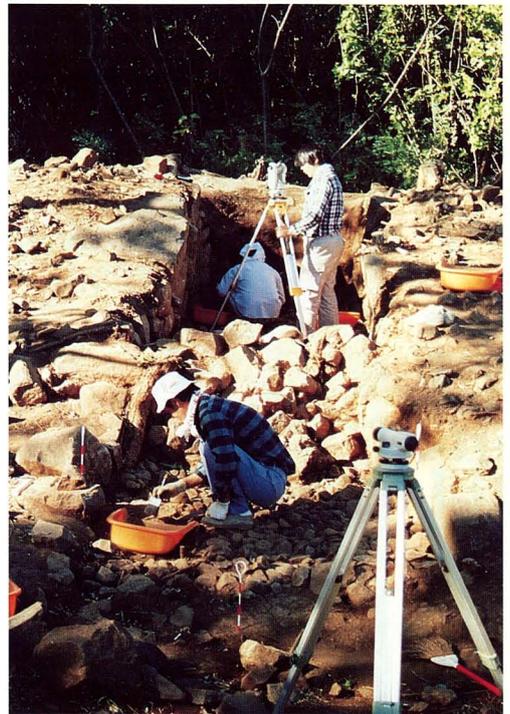


6 トレンチ内溝状遺構

中秣塚古墳



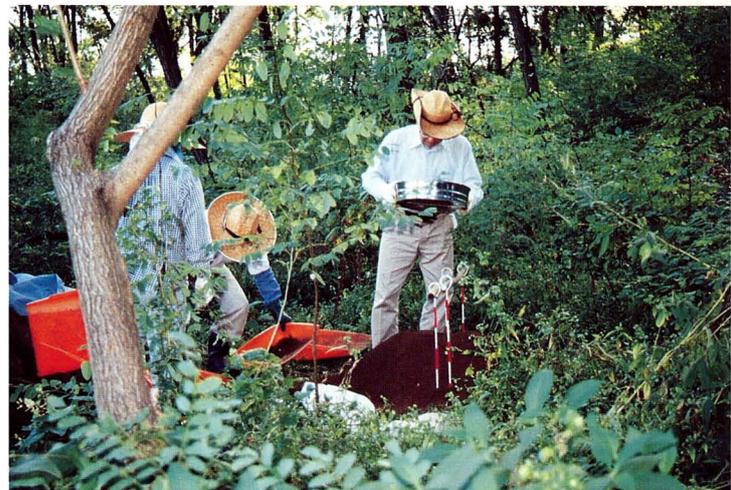
石室内作業風景



前庭部作業風景



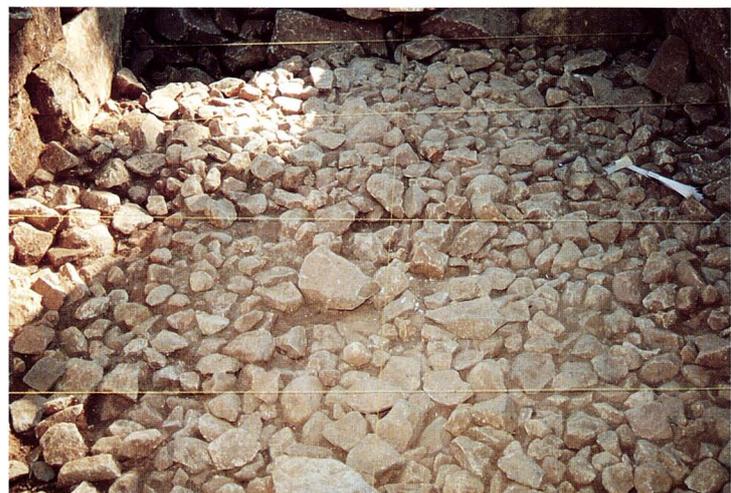
作業風景



作業風景



前庭部・石室



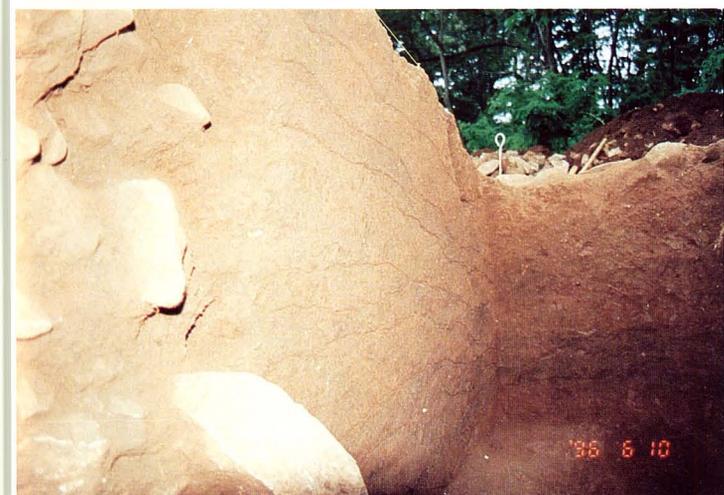
第1 礫床検出状況



東側トレンチ



北側トレンチ



西墳丘トレンチ



西側裏込め状況



北側トレンチ



西側墳丘集石状況



金環出土狀況



直刀出土狀況



直刀出土狀況



金環出土狀況



須恵器出土狀況



鉄鏃出土狀況



古墳清掃風景



中秣塚古墳完掘写真

